
ドッペルゲンガー

川本流華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドッペルゲンガー

【Nコード】

N2279C

【作者名】

川本流華

【あらすじ】

ドッペルゲンガーを見た者は数日中に命を落とす。という話だが、ユリはドッペルゲンガーと暮らしていた。

ドッペルゲンガー

ドッペルゲンガー

ドッペルゲンガー (Doppelgänger) とは、ドイツ語の doppel に由来している。英語でいえば double、要するに自分そっくりの分身のことである。それは全身像で現れることが少なく、顔や頭部、上半身などの部分像で現れることが多い。また、一般にモノトーンであることが多い。それは近くにいる人とは話そうとしない上に、本人と表情が異なったり、衣服が異なったり、さらには若かったり甚だしく老けて見えたりすることもある。しかし、本人はそれを見た瞬間、自分の分身であることを確信し、疑うことないという。そして、ドッペルゲンガーを見た人は数日後に死ぬ。

(と、いう話だけねど。……私はドッペルゲンガーと家族として暮らしている)

桜の花が咲き始めた四月の初め、すずめのさえずりに目を覚ましたユリは大きく伸びをした。そして、眠い目を擦りながらベッドから出ると、カーテンを開けた。

窓からは眩しい光が差し込み、穏やかな陽気が部屋を満たした。

ユリの顔は自然と笑顔になった。

「んー、いい天気だ」

ユリは再度大きく伸びをした。

「ユリ、サクラ、早く起きなさい。遅刻するわよ」

いつものように廊下から母の声が家中に響き渡った。母の名は蘭という。彼女は昔、大学のミスユニバーシティーに輝くほどの美人であり、容姿は未だ美しさを保っているが、ユリにとってはただの口うるさいおばさんである。

「二人ともいい加減に起きなさい」

「はい」

ユリは大声で返事をする、渋谷部屋を出て階段を降りていった。
(ママの怒鳴り声でせっかくの陽気が台無しだよ)

ユリは膨れっ面でリビングのドアを開けた。

リビングに入ると陽の光で優しく輝くフローリング、温かい香りとともに広がった新聞が真っ先に目に入った。

「おはよう、ユリ」

新聞から顔を覗かせると、ユリの父レウシアは優しく微笑みかけた。レウシアはカナダの生まれであり、性格は温厚、背が高く細身でスーツの良く似合うエリートサラリーマンである。

ユリは日本人の母親との間に生まれたハーフであり、ファーストネームはメルという。緑掛かった髪に父親譲りの青い目、小学生のときにカナダから転校して、現在は東京の高校に通う十七歳の少女である。

「おはよう、パパ」

ユリは笑顔であいさつを交わすと、食卓に座った。

「おはよう、ユリ」

「おはよう、ママ」

キッチンとリビングは繋がっており、ユリは朝食であるパンを皿に盛っている蘭とあいさつを交わした。そして、三人で朝食を摂り始めた。

なかなかサクラが起きてこない、しびれを切らした蘭はフライパンとオタマを手にとって廊下へと出て行った。すると、ユリはため息混じりで自分の耳を両手で塞いだ。

「サクラ、いい加減にしなさい。これから朝ごはんを無しにするよ」
蘭はフライパンをガンガン鳴らしながら声を上げた。

いつもの光景にレウシアは新聞で顔を隠しながら楽しそうにクスクス笑った。

「起きた、起きた」

サクラは部屋を飛び出すと、お決まりのように階段を尻もち付きな

がら落ちてきた。その音を聞きながら、レウシアはいつそう笑った。ユリは何がそれ程面白いのかわからず、首を傾げた。しかし、幸せそうなので、ユリも自然と口元が綻んだ。

「はい、起きた。ご飯ちようだい」

サクラはリビングのドアを勢いよく開けると、蘭に笑顔を向けた。蘭はため息をつきながら、パンを差し出した。

ユリとサクラという名前は生まれた季節にちなんで付けられた。

ユリは夏に生まれ、サクラは春に生まれた。

当然のことながら二人は双子ではない。にもかかわらず、二人の容姿は瓜二つであった。それもそのはず、サクラはユリのドッペルゲンガーなのである。

サクラがドッペルゲンガーであることは、ユリだけではなく当然両親もサクラ自身も知っている。

「もうすぐサクラの誕生日ね」

蘭は食卓に着くと二人にミルクを差し出した。

「……うん」

サクラは躊躇いながら答えた。サクラはなぜか自分の祝い事を好まないところがあった。

「何か欲しいものはない？」

「ううん。何にもいらないよ」

サクラは笑顔で首を横に振った。

「遠慮はいらさないよ。家族なんだから」

レウシアは穏やかな顔で静かに言った。その横でユリは大きく何度もうなずいた。

「そうだよ。せっかくの誕生日なのにもつたいないよ」

ユリの言葉を聞くと、サクラも小さくうなずいた。

「じゃあ、考えておくね」

サクラは皆に微笑みかけた。

ユリとサクラは朝食を終えると、急いで学校に行く支度を整えた。そして、二人は仲良く家を出て行った。

「ユリちゃん、サクラちゃん、おはよう」

「おはよう、おばさん」

二人は声を揃えて近所の人にあいさつをしながら、手をつないで学校まで駆けていった。

学校へ到着すると、二人は予鈴と共に教室へ駆け込んだ。学年は上がったがクラス替えはなく、教室内は知った顔ばかりであった。

「おはよう、ユサク」

「だから、略さないでよ」

同じ教室の友達ユリとサクラ、二人の名前を省略させて呼んでいた。しかし、二人は可愛くないあだ名に不満を浮かべていた。

「いいじゃない。だって、いちいち分けて呼ぶのめんどろなんだもん」

「だったらもつと可愛い名前つけてよ」

二人は声を揃え、同時に頬を膨らませた。すると、それを見てクラスメイトは声を上げて笑った。

しばらく他愛のない話をしていると、担任が入ってきた。

「はい、席について。出席をとります」

「はい」

担任は名簿を一度教卓でトントン鳴らすと、咳払いをしながら開いた。

「……メル・サクラさん」

「はい」

「メル・ユリさん」

「はい」

世間体では二人は姉妹ということになっており、教師も学生もサクラがドツペルゲンガーであることを知らなかった。

ユリは明るく活発な性格、サクラは穏やかで気立てのよい性格と性格は異なったが、クラスで人気者であることは変わらなかった。

そのため、休み時間になると多くの女子が二人を囲んだ。

「じゃあ、二人のあだ名は何にする？」

「そうだなあ……」

いつも二人の周りに集まる女友達は一齐に腕組みした。

「二人の名前にちなんで、ストリートに花は？」

「花ちゃん、おはようって？」

「かわいくないね。おまけに一人の子を呼んでいるみたい」

「て、いうか花ちゃんって今時ないよね」

女子たちはカラカラ笑っていた。すると、二人は目を見合わせて不快な顔を浮かべた。

「うそうそ。そうだなあ。……じゃあ、言葉を変えてフルールなんてどう？」

「フルール？」

一人の女子が提案すると、辺りの女子は首を傾げた。

「そう。フランス語で花。確か二人が生まれたカナダって英語とフランス語の二ヶ国語圏でしょう？ 英語でフラワーだとつまらないからフランス語」

「フルール、おはよう。……うーん」

「花ちゃんと変わらない気が……」

辺りの女子は馴染みのない言葉に違和感あり、抵抗を感じていた。

「ね、どうかな？」

「ユサクよりはいいかな」

ユリとサクラは目で互いの気持ちを確認すると、うなずいて答えた。

「じゃあ、二人を呼ぶときはフルールね」

「いいけど、本当の名前も忘れないでよ」

「えー、なんだっけ？」

一人がからかうと、二人はたちまち頬を膨らませた。それを見て、周りはドツと笑った。

授業が始まると、勉強をして、ときおり眠ってと、何気ない学校生活を過ごした。

授業が終わると部活に所属していない二人は、いつものように一緒に帰っていった。

どのスポーツも人並み以上に行ける二人は多くの部活から誘われるが、体力がなく息が続かないため断り続けていた。

「今日の晩御飯は何かな？」

「うーん、ハンバーグ？」

「それ、ただユリの好物を言っただけじゃない」

「いいじゃない。願うことが大切なのよ」

二人は和気あいあいと話しながら夕陽に溶け込むように家へと続く長い一本道を歩いていった。

出会い

小学校三年生になったユリは授業を終えると、下校途中にある公園へと掛けていった。両親は共に研究員としてどこかの研究室に勤めていたが、詳しくは聞かされていなかった。一人っ子のユリは日が暮れるまで公園で過ごすことが多かった。

家に戻ると、ユリは学校で配布された宿題の用紙を取り出した。

『……両親の仕事についてか』

両親は仕事のことを聞かれると、あからさまに不快な顔をするので、ユリはこの宿題に戸惑いを隠せなかった。

『答えてくれるかな？』

ユリはリビングのテーブルで頬杖をつきながら、両親の帰りを待った。

両親が家に帰ると、ユリは三人で食事を摂った。そして、二人の顔を窺った。

『来週の作文発表でパパとママのお仕事について聞いてくる宿題なんだけど、二人はどんなお仕事をしているの？』

ユリは二人が笑顔のときに恐縮しながら尋ねた。すると、二人はたちまち表情を曇らせた。

『人間について研究しているんだよ。ただ、ユリにはまだ難しいから……』

レウシアは言葉を濁した。横にいる蘭もまた、それ以上聞いて欲しくない顔をあからさまにしてみせた。

(……やっぱり、あまり答えたくないんだ)

ユリは気を使い、これ以上深く聞くことをあきらめた。

『わかった。パパたちは研究している人なんだね』

ユリはあどけなく笑うと、宿題を済ませるために自分の部屋へと戻っていった。その背中を二人は後ろめたい表情で見つめていた。

翌日も学校が終わるとユリは公園で一人過ごした。

ブランコに座ったユリは遠目に自分と同じくらいの年齢の人影を見つけた。

(……私?)

木の陰に隠れて顔が見えなかったが、ユリは直感的にそう思った。ユリはブランコから飛び降りると、急いでその木まで駆けていった。しかし、あと一歩のところまで人影は蜃気楼のように消えていった。

(消えた? 見間違い?)

ユリが呆然としていると、今度はブランコをこぐ音が聞こえた。

ユリが慌てて振り返ると、そこには見間違いようのない自分の姿があった。

(やっぱり私だ)

ユリは高鳴る鼓動を落ち着かせながら、今度はゆっくりと歩み寄った。

ユリがブランコの前まで行くと、少女は優しく微笑んだ。

『あなたは誰?』

『……私はあなた?』

ユリは少女の言葉が理解できずに首を傾げた。すると、まったく同時に少女も首を傾げた。

『お名前は?』

『あなたの名前は?』

聞き返されたユリはニッコリ笑って答えた。

『私はユリ』

『じゃあ、私もユリ』

ユリは目を丸めた。

『おかしな人ね』

二人は同時に言葉を発し、声を上げて笑った。

ホームルーム終了の鐘がなると、ユリはサクラに体を揺すられ目を覚ました。

「ほら、いつまで寝ているの？」

「う、うん」

ユリはなぜ目の前に自分がいるのか一瞬理解に困った。このようなことは度々あり、ユリは寝ぼけているからだと自分に言い聞かせた。

「さあ、帰ろう」

ユリは差し伸ばられた手を掴むと、ゆっくりと起き上がった。

「私、どのくらい寝ていた？」

「ホームルーム中ずっと。先生、何度もユリのほうを見てため息をついていたよ」

サクラは呆れた顔で答えた。

「私たちが出会った頃の夢を見ていたんだ」

ユリの言葉を聞くと、サクラは一瞬眉をひそめた。サクラにとって過去を思い出すことは苦痛であったからである。

「そ、そう。カナダの公園だっけ？」

サクラはすぐに笑顔を作った。

「うん」

ユリはサクラが無理をして明るく振舞っているのを感じ、これ以上この話をするのを止めた。

ユリは家に帰っても夢のことが頭から離れなかった。

(サクラはいつからこの世に存在しているのだろう?)

ユリはサクラの過去を知りたいと思ったが、家族の間で禁忌とされていたので聞けずにはいた。

ユリは胸に支えるものを感じながら、一日を過ごした。

翌日、ユリはいつもどおり蘭の怒鳴り声がかだます朝を迎えた。

大きなあくびをしながらリビングに行く、サクラのドタバタを聞きながら朝食を摂った。そして、誰一人何一つ違和感を持たずにサクラと登校した。

「ユサク、おはよう」

教室に入るなり声が上がった。

「結局ユサクに戻っているじゃない」

二人は声を揃え、ため息をついた。まったく同じタイミングであったため、クラス中がドツと笑った。

「ごめん、ごめん。で、何だっけ？」

「フルール」

周りの女子と話しながら二人は席に着いた。

担任が教室に入ってくるのと同時に一人の男子が顔を覗かせた。

「オリー君、入ってきていいわよ」

担任に手招きされると、オリーは恐る恐る教室へ入ってきた。

「転入生を紹介します。ウィリアム・オリー君」

「ウィリアム・オリーです」

長身で青い目、幼顔のオリーは女子の目を一瞬で釘付けにした。

「オリー君はユリさんとサクラさんと同じカナダ出身だそうです。仲良くしてくださいね」

担任の言葉を聞き、二人とオリーは目を合わせた。

「仲良くしてくださいね」

オリーは担任の言葉を繰り返すと、二人に微笑みかけた。

放課になると、ユリとサクラ、それに多くの女子たちはオリーを連れて校内を案内して回った。

「ここが購買ね。パンとかお昼ご飯を買ったりする場所」

二人が親身に案内する一方で、

「オリー君、彼女いるの？」

「カナダってどんな所？」

クラスの女子たちはオリーを質問攻めに行っていた。

「ここら、目的は案内でしょう。それにカナダってどんな所って、私たちが散々話したでしょう？」

二人は腰に手を当てた。

「カナダって言っても広いでしょう？ ユサクとは違つかもしれないじゃない？」

「ユサク？」

オリーは奇妙なあだ名に興味を持った。

「そう、ユリとサクラでユサク」

「違うでしょ。私たちはフルール」

その会話を聞き、オリールは声を上げて笑った。

「もう、勝手にしなさい」

苛立ちを覚えた二人はフランス語で呆れるように言うと、足早に教室へと戻っていった。

「Wait ユサク」

オリールが慌てて声を掛けると、二人は振り返り睨み付けた。すると、オリールはすぐさま口に手を当てた。

授業が終わると、オリールは二人のもとへ歩み寄った。

「さつきはごめんなさい、ユリ、サクラ」

「もう、いいって」

二人の言葉にとげを感じたオリールは困った顔で頬を掻いた。

「転入して友達ができるか不安だったから、周りに人が集まって、嬉しくて…… つい、調子にのってしまいました」

オリールは素直に頭を下げた。二人は目を見合わせると、自分たちが日本に来たときのことを思い出した。

「怒っていないよ」

二人は優しく微笑みかけた。すると、オリールは嬉しそうに笑顔を見せた。

「じゃあ、また案内してくれますか？」

「ええ、もちろん」

二人は帰る支度をしたカバンを持って立ち上がった。

「じゃあ、今から部活の案内でもしょうか？」

「はい」

オリールの返事を聞くと、二人は先導して歩き出した。

「ま、待ってください、ユサク。あつ……」

オリールは慌てて口を押さえた。二人は大きいため息をつくとき、三人は目を見合わせ、大いに笑った。

一通り案内を終えると、時計は六時を回り、外は日が暮れかけて

いた。

「遅くまですみませんでした」

「うっん、いいよ」

ユリは首を横に振った。

「それじゃあ、帰ろうか」

「そうだね。あまり遅いとママの怒鳴り声がここまで聞こえてくるかもしれないから」

二人はその様子を想像するとクスクス笑った。

「送りますよ」

「ありがとう。でも、大丈夫。明るい道で帰るから」

二人は笑顔で答えると、オリールに手を振りながら校門をくぐっていった。

家に帰ると、蘭が玄関前に仁王立ちしていた。

「何時だと思ってるの？」

「あ、あのね。今日、転入生が来てね。学校を案内していたんだ」
二人は遅くなった理由を説明した。蘭は疑い眼で二人を見たが、とりあえずリビングへと向かった。

「……それで、転入生ってどんな子なの？」

蘭は二人に夕食を出しながら尋ねた。

「名前はオリール」

「私たちと同じカナダの出身の男の子」

「放課に学校の中を案内して」

「それで、放課後には部活の案内をしていたんだ」

二人は代わる代わる説明をした。

「かっこいいの？」

あまりに二人は活き活きと話すので、蘭は顔をニヤつかせた。

「どうかな？」

「他の男子と比べればいいほうじゃない？」

「でも、性格はどうかな？ お調子者だし」

二人は質問に質問を重ねて考えた。その横で蘭はクスクス笑った。

蘭に一通り話し終えると、レウシアが帰ってきた。

「パパ、お帰り」

二人はレウシアを笑顔で迎えた。

「ただいま。どうかしたの？」

レウシアが尋ねると、二人は目を見合わせてニンマリと笑った。

「あのね。今日転入生が来たんだ」

「名前はオリールと言ってね……」

二人は同じ会話を繰り返し説明した。その様子を蘭は優しく微笑みながら見守った。

そして、穏やかな夜が更けていった。

一週間が経ち、サクラは十八回目の誕生日を迎えた。サクラは女友達を招き、家で小パーティーを開いた。プレゼントにデジタルカメラを買ってもらったサクラは友達や家族と一杯写真を撮って思い出を残した。

「オリール君は呼ばなかったの？」

蘭が尋ねると、皆は一斉にサクラのほうを向いた。

「サクラ、オリールのこと好きなの？」

「ち、違うよ。ママ、突然何を言うの？」

サクラは慌てて答えると、怒り口調で蘭を見た。

「あら、クラスメイトなんだから招待したっておかしくないでしょう？」

蘭は得意気に言い放った。

「そうだよ。呼べばよかったのに」

一人が言うのと、皆が大きくうなずいた。

「いいじゃない。今日は女の子同士の誕生日会」

「そうそう」

ユリがかばうと、サクラは小さく何度もうなずいた。

「ごめんね。男がいて」

レウシアは恐縮しながら皆の顔を窺った。その顔を見て一同はドッ

と笑った。

「パパ、女装する？」

「あら、いいわね。お化粧してあげましょうか？」

蘭が言うと冗談には聞こえず、レウシアは料理を盛った皿を手に持ちながらキッチンへと逃げていった。その様子を見ながら、皆はさらに笑った。

夜が更けると、遅くなりすぎないうちにパーティーはお開きとなった。レウシアは遠くの家から来ている人を送り届け、二人は蘭と一緒に片づけをした。

「二人で写真撮ろうよ」

サクラの言葉を聞くと、ユリは快くうなずいた。

「じゃあ、撮ってあげる」

蘭はカメラを手にとると、二人に向けた。二人は手をつなぐと寄り添いながら優しく微笑んだ。

コンテスト

新学期が始まって二ヶ月以上が経ち、連日雨が降り続く季節となった。

「そろそろあれの季節だね」

「そうそう、今年は誰が選ばれるのかな？　きっとオリールは確定だよ」

女子たちが小声で話し合うのを男子たちは聞き耳を立てた。

「お前、誰に投票するの？」

「えっ、まだ決めてない」

男子たちの話にも同じように女子たちは耳を傾けた。

教室内が浮き足立つのを感じて、オリールは不思議な顔を浮かべた。

「何の話？」

オリールがユリとサクラに尋ねると、二人はクスクス笑った。

「さあ、ね」

「直にわかるよ」

二人が答えると、タイミングよく担任が入ってきた。そして、ホームルームが始まった。

「さて、皆が新学期に慣れてきたということで毎年恒例のミス・ミスターコンテストを行います」

担任は嬉しそうに紙を配り始めた。すると、オリールはあからさまに首を傾げた。

「そうか。オリール君は初めてだね。その用紙に好きな異性の名前を書いて廊下にある応募箱に入れるの。上位五名が掲示板で発表され、男女一位の人たちは表彰されます」

「へー」

オリールは相づちを打つと、横目でユリとサクラのほうを見た。

「ふーん」

担任がニヤリと笑うと、オリールはたちまち顔を赤らめた。

「なにになに？」

「えっ、誰？」

女子たちがどよめき始めると、オリールはさらに小さくなった。

「はいはい。そういうことで、この話はおしまい。次の話に移りますよ」

担任が手を叩くと、徐々に静まっていった。それと同様にオリールの顔色も良くなった。

放課後、オリールは女子たちに囲まれていた。

「オリールは誰に入れるの？ 私？」

「バーカ、あんたなんかに入れるわけがないでしょう」

他の男子たちはその光景を見て、つまらなそうな顔を浮かべながら帰っていった。ユリとサクラも話をしながら、困った顔をしているオリールの前を通って帰っていった。

下校中、二人はコンテストの話をしていた。

「ちよつと可哀想だったかな？」

ユリは立ち止まって校舎を見た。すると、サクラも立ち止まって振り返った。

「オリール？ うーん、女の子に囲まれて可哀想なことはないんじゃない？」

サクラは再び歩き始めた。

「それで、ユリは誰に投票するの？ オリール？」

「まだ決めてない」

ユリはサクラに駆け寄ると、用紙を取り出した。

「サクラは？」

「私は興味ないから投票しないよ」

「今年も？ サクラって好きな人いないの？」

サクラは笑みを浮かべながらうなずいた。

「ウソだ。誰？」

「いないよ」

サクラは夕陽が沈むのが見える長い一本道を駆けていった。ユリは急いでその後を追いかけた。

家へ帰り、二人と蘭は夕食を終えた。そして、サクラは風呂に入り、ユリと蘭はリビングでくつろいだ。

「そういえば、今度またコンテストがあるんだ」

ユリは用紙を取り出し、蘭に見せた。

「そう。去年はユリが二位でサクラが三位だったわね」

蘭は用紙を手に取った。

「一昨年はサクラが二位で私が三位」

「今年は毎年一位だった子が卒業したからどちらかが一位ね」

蘭は優しく微笑んだ。ユリはお茶をすすると一息ついた。

「取れるかな？」

「もちろん。二人とも私の子なんだから。表彰式にはカメラを持って行くからね」

蘭の顔を見てユリもつられて笑顔になった。

蘭はユリの頭をなでた。

「それで、ユリは誰に投票するの？」

ユリは恥ずかしそうにうつむいた。

「オリー君？」

ユリが小さくうなずくと同時にサクラがリビングに入ってきた。

「何？ 何の話？」

「な、何でもない。さあ、私もお風呂に入ってこよう」

ユリは立ち上がると、慌てた様子で風呂へと向かった。

部屋で着替えを持ち、風呂場のある一階に下りてくると、リビングからは笑い声が洩れてきた。

（ママ、さっきのことサクラに話していないかな？）

ユリは不安に思いながら風呂に入った。

サクラは蘭と話しながら牛乳をコップに注ぐと、リビングへ向かった。そして、ユリの座っていた席に座ると、蘭の持っている用紙に目を遣った。

「コンテスト？」

「ええ。今年は二人のどちらが一位かなっていう話」

「そんなの、わからないよ。かわいい子は一杯いるんだから」

サクラはタオルで髪を拭いた。

「なれるわよ」

「あんまり興味ないなあ」

サクラは他人事のように笑った。

「ところで、サクラは誰に投票するの？」

「ん？ 誰にもしないよ」

蘭はジツとサクラの目を見た。すると、サクラは視線を逸らし、牛乳を飲んだ。

恋する乙女の表情に蘭はクスクス笑った。

一週間が経ち、コンテストの応募が終わった。

「はい。それではコンテストの結果は今週中に掲示板にて行います。皆、浮かれるのもいいけど、勉強のほうも怠らないように」

ホームルームが終わると、多くの生徒が互いに誰に投票したかを聞いて回った。

「結局誰に入れたの？」

ユリは後ろの席からサクラの背中を突つつくと、サクラは笑いながら首を横に振った。

「ウソだ。この前、部屋で書いているところ見たんだから」

「入れてないって」

サクラは逃げるように教室を出て行った。

「ごめん、待ってよ」

ユリは急いでサクラの後を追った。その様子をオリールはジツと見ていた。

「それで、オリールはあの二人のどちらに入れたのかな？」

一人の女子がオリールに尋ねた。

「俺は……」

周囲の騒ぐ声にオリールの声はかき消された。オリールは静かに立ち上がると、カバンを持って教室を出て行った。

サクラに追いついたユリは、サクラのカバンを持って機嫌をとった。

「ごめん、もう聞かない」

そう言うものの、ユリはもどかしそうにしていた。

「本当に入れていないの。入れようと思って名前を書いたけれど、入れるの止めちゃった」

サクラは夕陽を見つめた。その横顔はあまりに大人っぽく見えた。

「で、ユリは誰に入れたの？」

「え？ …… 教えない」

ユリはサクラにカバンを返すと、駆け出した。

「誰？」

サクラはユリを追いかけながら尋ねた。

「おしえなーい」

ユリは振り返り、イーっと歯を見せると再び走り始めた。

本当は二人とも互いが誰の名前を書いたかを聞きたくなかった。

二人は互いの気持ちをごまかす様に夕陽の中へ溶け込んでいった。

週末にコンテストの結果が掲示板に貼り出された。それと同時に生徒たちが集まり、賑わいを見せた。

「やっぱり、男子の一位はダントツでオリールか。女子もやっぱりユサク姉妹だね」

「えっ、どっちが一位？」

通りがかった女子が隣にいたクラスメイトに尋ねた。

「サクラが一位でユリが二位」

「へー、姉妹対決はサクラの勝利か。でも、一票差だね」

登校してきたユリとサクラは、真っ先に掲示板に集まる人たちが目に留まった。

「サクラ、結果が出たみたいだよ。行こう」

「う、うん」

ユリはサクラの手をとると、掲示板へと向かった。

「あ、ユサク」

「フルールだってば」

ユリはいよいよ呆れ顔を浮かべた。

「ごめん。それよりお二人さん、コンテストの上位を独占しているよ」

「へー、どれどれ」

二人は掲示板に目を遣った。

結果を見るなりサクラは罰の悪そうな顔をした。

「男子はやっぱりオールドか。あっ、サクラ一位じゃない。やったね」

ユリは自分のことのように声を弾ませ、手を叩いて喜んだ。

「でも、一票差だからほとんど同率だね」

サクラは、はにかみながら言った。

「まあまあ、せっかくだから一番をもらっておきなよ」

「……そうだね」

ユリが明るく振舞ったおかげで、サクラは気負いをなくした。

サクラは自分が主になるイベントを嫌った。

(気を負う必要ないのに)

ドッペルゲンガーであるサクラが陽の目を見るのを嫌う様子をユリは憂いの表情で見つめた。

ユリは目一杯の笑顔を作った。

「表彰は来週の月曜だって。ママ、きつと張り切って来るよ」

「うわ、嫌だな」

「ご愁傷様」

二人はフッフと笑いながら教室へと入っていった。

教室の入り口ではオールドが友達と話していた。

「よっ、ベストカップル」

サクラとオールドが肩を並べると、一人の男子が声を上げた。それ

と同時に教室中から拍手が起こった。

「おめでとう」

「お似合いだよ」

さまざまな声が飛び交う中、ユリは拍手をしながら一人自分の席へと向かった。

「もう、やめてよ」

サクラは嫌がる仕草を見せながら、恥ずかしそうに席に着いた。

サクラが自分のことを気にしていることに気づいたユリはおめでとうと笑顔で笑いかけた。

授業が終わると、二人は真っ直ぐ家に帰った。

ユリが急ぎ足で歩くのに対し、サクラはゆっくり歩いていた。最後に痺れを切らしたユリはサクラの手を引いて歩き始めた。

「ママ、コンテストの結果が出たよ」

玄関を開けるなり、ユリが声を上げた。すると、リビングから蘭が顔を覗かせた。

「どうだったの？」

「私が二位でサクラが一位」

ユリは声を弾ませた。一方でサクラは横で照れくさそうに笑った。

「何で二位のあなたの方が嬉しそうなの？」

「だって、サクラが一位だったんだよ。サクラ自身は照れるばかりで全然喜ばないし」

ユリはサクラの顔を窺った。

「そんなことないよ。感極まっております」

サクラは妙な言葉遣いで頭を下げた。

「さあ、そんなところで話していないで中に入りなさい。ケーキ、買ってあるわよ」

蘭は二人に穏やかな顔をして微笑みかけた。二人は目を見合わせる嬉しそうにうなずいた。

二人は男子の結果を含めてコンテストの結果について蘭に伝えた。「……で、月曜日に運動場で表彰式があるんだ。雨の場合は体育館」

「それは楽しみね。何を着ていこうかしら」

蘭はクローゼットの中を思い浮かべた。

「本当に見に来るの？」

サクラが慌てた様子で尋ねると、蘭は当然と言うが如く大きくうなずいた。

「当たり前でしょう。ママとしてはオリー君を見ておく必要があるからね」

蘭が張り切るのと反比例してサクラのテンションは下がっていった。

「私、二位でよかった」

ユリはホッと胸をなで下ろした。

学校での出来事を一通り話し、三人が夕食を終えると、レウシアが帰宅した。

ユリは玄関に飛び出すと、レウシアの鞆を手にとって、リビングまで連れてきた。そして、ユリと蘭は嬉しそうにコンテストの話を始めた。その横でサクラは何度もため息をついた。

「よかったね、サクラ。残念だけれど月曜は仕事でいけないな」

「別に来なくていいって。どうせ校舎内には入れないんだし」

サクラの言葉を聞くと、蘭は残念そうな顔をした。

「入れないの？」

「当たり前でしょう。ママはフェンスの外までよ」

サクラは呆れた表情で言った。

「蘭、あまり迷惑をかけないようにしなさい」

レウシアは強く念を押した。すると、蘭は途端にしよんぼりした。そのやり取りをユリはクスクス笑いながら見ていた。

月曜日になり、快晴の中表彰式の日を迎えた。蘭は必死の説得の末に特別校舎へ入ることを許され、家のカメラとサクラのカメラの二台を首から提げて教師たちの横に立った。

(恥ずかしいな。早く終わってよ)

サクラは何度もため息をつきながら手をまごっこさせた。

「緊張しているの？」

隣に立っているオリールが声を掛けた。

「違う。あれが恥ずかしくて」

サクラは蘭を横目で見た。オリールは鼻歌まじりで肩を揺らし、リズムをとる蘭の姿を見て声を殺して笑った。

「そんなに可笑しい？」

「いや、うらやましいんだよ。俺には写真を撮ってくれる人もいないからね」

オリールは珍しく悲しそうな表情を見せた。

オリールはあまり自分のことを話さないため、サクラは家族構成さえ知らなかった。

「ご両親は？」

「母はいないんだ。父は仕事が忙しいらしくて出張三昧。とてもこんなところに顔を出さないよ。今は祖父と暮らしている」

オリールは少し寂しそうな目で遠くを見つめた。その横顔をサクラも哀しそうに見つめた。

お構いなしのフラッシュが光った。サクラは驚きながら蘭のほうへ顔を向けると、蘭は親指を立てて、グッドとポーズを作った。

「写真ができれば一枚くれない？」

オリールは笑いを堪えながら、サクラの顔を窺った。

「何枚でもあげるよ。よかったらママごともらっていいよ」

サクラが大きくため息をつくとき、オリールはいよいよ堪えきれずに笑いをもらした。そして、オリールが親指を立て蘭に向けると、蘭はためらうことなくシャッターを切った。

ユリは朝礼台の前で他の生徒と一緒に並んでいた。

(楽しそうだな)

ユリは二人のやり取りを寂しそうに見つめていた。

校長の長い話が終わると、二人は順番に朝礼台の上で表彰された。

「ウィリアム・オリール君。おめでとー」

オリールが表彰状を受け取り、朝礼台を降りると入れ替わるようにサクラが台上った。

「メル・サクラさん。おめでとう」

「ありがとうございます」

サクラは表彰状を受け取り、顔を上げると、どこからか冷たい視線を感じた。

（何だろっ？ 嫌な感じ。でも、どこかで感じたことがある）

サクラは手を震わせながら周りを見渡した。その様子を不思議に思った蘭は同様に周りを見回した。そして、校舎の外にいる老人を見つけると、蘭は驚きのあまり啞然とした。

（何である人がここに？）

蘭は慌てて校舎の外へと駆けていった。サクラとユリも振り返ると、その老人と目を合わせた。

老人は駆けてくる蘭の様子を見て呆れ顔を浮かべ、その場を立ち去ろうとした。

「待って」

蘭が声を上げると、老人は立ち止まった。

「まさか本当に二人と暮らしているとはな。二人が出会って直に十五年か。もう長くは続かないぞ」

老人の言葉を聞くと、蘭の顔が青ざめた。

「どういうことですか？」

「まあ、人体実験を繰り返し、社会追放された私には関係ないことだ」

「なぜここに？」

蘭が尋ねると、老人は朝礼台のほうを見た。

「孫の晴れ舞台を見に来ただけだよ」

「ウィリアム・オリール？」

老人は鼻で笑うと、うなずいた。

「安心していい。君たちに会ったのは偶然だ。干渉する気もない」

老人は振り返るとゆっくり立ち去った。

「待って、シエリー博士」

蘭は必死に声を掛けたが、シエリーは立ち止まることなく歩いてい

った。

ユリの頭にサクラと出会ったときの光景が浮かび上がった。すると、ユリは息苦しさを感じ、その場で胸を押さえて倒れこんだ。

「ユリ」

サクラは表彰状をその場に落とし、ユリのもとへ駆け寄った。サクラの声を聞き、蘭も慌ててユリのもとへ駆け寄った。

「急いで保健室へ」

教師の一人がユリを抱えあげると、蘭はその腕を掴み、首を横に振った。

「家に連れて帰ります」

蘭は教師からユリを受け取ると、荒い息をつくユリを背中に抱えた。

「サクラ、手伝って」

「う、うん」

サクラはカバンを取りに教室へと向かった。

「大丈夫だよ、ユリ」

蘭は赤ん坊をなだめるように優しく声を掛けた。

ユリは安心したのか、次第に呼吸を落ち着かせると、蘭の背中で静かに寝息をたてた。

作文

ユリは小学四年生になり、自分と似た少女と出会って初めての春を迎えた。

『ねえ、今度家に来ない？』

公園でブランコをこぎながらユリは少女に尋ねた。

『えっ、でも？』

『いいじゃない。だって、友達でしょう？』

ユリの言葉を聞くと、少女ためらいながらコクリとうなずいた。

『じゃあ、決まりね。パパとママ、驚くだろうな』

『どうして？』

『だって、こんなに二人が似ているんだよ。もしかしたら、入れ替わっても気づかれないかも』

ユリは楽しそうに笑った。

中年の男性が公園に入ってきた。すると、少女は慌てた様子でユリから離れた。

『サクラ、帰るぞ』

『は、はい』

男がサクラに声を掛けると、サクラは上ずった声で返事をした。そして、ユリの顔を見ることがなく男のもとへ走り寄った。その表情は悲しそうにも辛そうにも見えた。

（あの子、サクラって言うんだ。ちゃんと名前があるのに、何であんなこと言ったのかしら？）

ユリは首を傾げながらもその名前を忘れないよう胸の奥で反芻した。公園を出る際、サクラは一度だけ振り返り小さく手を振った。

『ばいばい』

ユリが声を上げると、男は立ち止まり振り向いた。そして、ユリの姿をジッと見た。

『あれは……』

男は驚きを浮かべていた。

サクラは慌てて男の背中を押し、男を前に向かせた。そして、サクラは男の手を引くようにして歩いていった。

男は横目でユリを見下しながら、鼻で笑い公園を去っていった。

ユリが目を覚ますと、そこは自分の部屋のベッドであつた。

「今朝見た老人、あの時サクラを迎えに来た人に似ていた」

ユリはベッドで横になりながら考え込んだ。

しばらく考え込むと、ユリの腹の虫が鳴った。

「お腹すいた。今何時？」

ユリが時計を見ると、夕方の七時を回っていた。外に目をやるとすでに陽は沈んでおり、下の階からは夕食のにおいが漂ってきた。

「ユリ、入るよ」

部屋のドアを叩く音と同時にサクラの声がした。

「うん」

ユリはゆっくりと起き上がると、ベッドに座った。

サクラはドアを開けると、部屋の電気をつけた。

「やっと、起きた。具合はどう？」

「うん」

「ご飯できているよ。食べられそう？」

「うん」

ユリは穏やかな顔をしてうなずくと、立ち上がるうとした。しかし、足にうまく力が入らず、思うように立ち上がれなかった。

サクラはユリのもとへ歩み寄ると、手を差し伸べた。ユリは小さくうなずくと、その手を掴みゆっくりと立ち上がった。

「また、昔の夢を見たんだ」

「そ、そう」

ユリはサクラが嫌がるのを承知で話し始めた。

「今朝ママが話していた老人、昔サクラを公園に迎えに来た人に似ていない？」

ユリの言葉を聞いた瞬間、サクラは立ち止まった。サクラの手が一瞬で汗ばんだ。

「遠くで見えなかったからわからない」

「そっか」

「私、今が一番幸せなんだ。お願い、もう昔の話はしないで」

「うん。……ごめん」

ユリは口を閉じた。そして、二人は互いに手を力強く握りながら階段を下りていった。

リビングには夕食が並べられていた。

食卓にはユリが倒れたことを聞き、急いで帰宅したレウシアと深刻な顔をした蘭の姿があった。

「ユリ、大丈夫？」

「うん。心配かけてごめんね」

レウシアが心配そうに尋ねると、ユリは穏やかに微笑みながら答えた。

レウシアは深く息をつくとき、ユリとサクラは席に座った。そして、家族四人は揃って食事を摂った。

世間話をしながら、いつもと変わらぬひと時を過ごした。

ユリは食事の最中に何度もあの老人のことを聞こうと思ったが、空気が重くなる気がして話すのを止めた。聞いてはならない雰囲気がある場を包んでいた。

「ユリは明日も念のために学校を休みなさい。学校には連絡しておくから」

食事を終えると、蘭は食卓を片付けながらユリに言った。

「何で？ 大丈夫だよ」

ユリの言葉を聞いても、蘭はただ首を横に振るだけであった。

「いいじゃない。ママ公認で学校を休めるんだから」

サクラはユリの背中に手を置きながら笑いかけた。しかし、ユリはうーんと唸るだけであった。

「あなたは行くのよ」

「えー、ユリが心配だから休んでついているよ」

「ユリにはママがついています」

サクラと蘭のやり取りを横目に、あからさまにユリは不機嫌そうな面持ちを浮かべた。

ユリは深くため息をつくとき、部屋へと戻っていった。

(何さ。みんなして私を病人扱いして)

ユリはベッドに入ると、布団に潜り込んだ。

昼間に十分睡眠をとったユリは真夜中に目を覚ました。

(三時か)

ユリはのどを潤すためにキッチンへと向かった。すると、リビングの明かりがついているのに気がついた。

ユリは足を忍ばせつつリビングを覗いた。

「……がドツペルゲンガーであることを話されたら、私たちの生活は壊れてしまう。あの人は偶然だと言っていたけれど、本当のところはわからないわ。早くここから去りましょう」

蘭は何かに怯えるように手を震わせた。

「もし我々を追ってきたのなら、いずれまた彼は我々のもとに現れるだろう。それでは意味がない。彼が今どこで暮らしているのか、サクラの名簿を見てわかったから、明日話をしてくる。いいね？」

レウシアは冷静に話を進めた。そして、蘭がうなずくと、レウシアは優しく手を握り微笑んだ。

「大丈夫だよ」

「だって、あの人が長くは続かないと……」

蘭はうつむき、下唇をかみ締めた。

(長く続かない?)

ユリはその雰囲気から聞いてはいけないものを聞いてしまった気がした。

ユリは二人に悟られないように部屋へと戻った。

(あの老人はサクラがドツペルゲンガーだと知っている人? やっぱり、昔サクラを迎えに来た人?)

ユリはベッドで横になりながら、あれこれ考え込んだ。そして、いつの間にやら眠りについた。

翌朝、ユリはサクラの階段から落ちる音で目を覚ました。

「もう朝か」

ユリは目をこすりながら起き上がるとリビングへ向かった。

リビングにはサクラと蘭だけで、レウシアの姿はなかった。ユリはふと夜中の会話を思い返した。

「あれ？ パパは？」

「パパは仕事があつてもう出かけたわ」

蘭はサクラに答えながら朝食を差し出した。その言葉を聞きながら、ユリは気に留めないふりをして席に着いた。

サクラが慌しく家を出て行くと、ユリは黙ったまま席を立った。

「ユリ？」

朝から元気がないユリを見て、蘭が心配そうに声を掛けた。すると、ユリは反射的に笑顔を作った。

「大丈夫だよ。部屋の片付けしているね。こういう日じゃないと、なかなか出来ないから」

「……そうね」

ユリは明るく振舞いながら自分の部屋へと戻っていった。その背中を蘭は不安気に見つめた。

ユリの机は教科書やら少女マンガやらがごった返しており、机の中や本棚もすき放題散らかっていた。

「……これは一日かかるかも」

ユリは頭を掻きながら渋々片づけをし始めた。

「この本、読んだことあつたかな？」

ユリは片づけをしながら机の中の奥底から出てくる雑誌を読み直した。

ユリが部屋に戻ってから数時間が経った。部屋から物音がしないため、蘭は気になって様子を階段を上った。

「ユリ？」

「何？」

中から返事が聞こえると、蘭はドアを開けた。すると、ユリはベッドに座りながら色褪せた絵本を読んでいた。

「何をしているの？」

蘭が尋ねると、ユリはベッドに座り直した。

「本棚を整理していたら奥から昔の本やら雑誌が出てきたんだ」

「そう。……ママは少し出かけてくるから、作っておいたお昼ご飯温めて食べてね」

ユリは蘭の言葉を聞くなり、うなずいた。いつもならどこに行くのか尋ねるのに、蘭の沈んだ顔を見たら聞くことができなかった。

蘭もうなずいて部屋を出て行くとした。

「この絵本、日付を見たら小学校に入る前に発売されたものなんだ。

……不思議だね。昔読んだはずなのに初めて読んだ感覚」

楽しそうに話すユリの声に、蘭は一瞬うつむいた。

「……何かデザートを買ってくるね。昼過ぎには戻るから」

「本当？ やった」

蘭は足早に部屋を出て行った。ユリは蘭の様子がおかしなことに気づいたが、何も聞かずに絵本を読み続けた。

一通り読み終えたユリは散らかった本を本棚に閉まった。すると、昔書いた作文が出てきた。

「これ、小学校三年生のときに書いたものだ」

ユリは作文を手にとると、斜め読みをした。

（パパとママは昔どこかの研究室で働いていて、その頃サクラと出会って……いろんなことがあったなあ）

ユリは昔を懐かしんだ。しかし、一つの疑問が湧いて出た。

（あれ？ サクラと出会うその前は？ いろんなことがあったんだろっ？）

ユリはサクラと出会う前を思い出そうとしたが、なかなか思い出せずにいた。

ユリはベッドに横になると、過去の出来事を年を遡るようにして

思い浮かべた。

(すべてを忘れたわけではない。作文はサクラと出会う前だし……でも、二年生の思い出はない。うーん……)
いたずらに時間が経ち、お腹の空いたユリはとりあえずキッチンに向かった。

「ママ、どこに行っただらろう?」

ユリは寂しさを感じながら一人で昼食を摂った。

昼食を食べながら、ユリは相変わらず昔を思い返していた。

(やっぱり、思い出せない。ママに聞いてみようかな?)

昼食を終え、ユリはリビングでテレビを見ながらくつろいで。そして、しばらくして蘭が帰ってきた。

「ユリ、シュークリーム買ってきたから一緒に食べましょう」

蘭の声がすると、ユリは嬉しそうにリビングから顔を覗かせた。

「おかえりなさい」

「ただいま」

蘭は笑顔で答えると、ユリにシュークリームを手渡して、そのままお茶を入りにキッチンへと向かった。

用意が整うと、二人はリビングでくつろいだ。

「片付けは済んだの?」

蘭が尋ねると、ユリは笑いながら首を横に振った。

「だと思った」

「だって、面白そうな本とか色々出てくるんだもん」

ユリは恥ずかしそうに言い訳をした。その顔を見て蘭は穏やかな表情で微笑んだ。

「そういえば、私ってどんな子供だった?」

ユリが尋ねると、えっ、と蘭は首を傾げた。

「どうしたの? 突然」

「あのね、小学三年生のときに書いた作文が出てきたんだけど、その前のことを思い出そうとしてもなかなか思い出せないんだ」

ユリの言葉を聞くと、蘭はたちまち表情を曇らせた。すると、ユリ

は慌てて続けた。

「ほら、サクラがいるときは過去の話はできないじゃない？」

「そうね。……恥ずかしいことだけれど、私たちは研究室に閉じこもっていたから誰と何をして遊んでいたとかわからないな」

蘭は申し訳なさそうにうつむいた。

「そっか」

「でも、よく公園で遊んでいたんじゃない？ ブランコに乗って遊んでいたって話はよく聞いたわ」

蘭の言葉を聞くと、ユリは鮮明に公園の情景を思い出した。

「そうだったね。……そう、だった」

ユリは窓の外を見つめながら昔を想った。その横顔を蘭は哀しそうに見つめた。

「よし、部屋を片付けよう」

ユリは食器をまとめると席を立った。

「キッチンを片付けたら手伝ってあげる」

「うん」

ユリは笑顔で答えると、自分の部屋へと上がっていった。

蘭は食器を重ねると、ユリの確かな温もりを感じた。

(しっかりしないと)

蘭は自分に言い聞かせると、頬を両手で叩いた。

蘭は急いで食器を片付けると、ユリの部屋へと向かった。ドアを開けると、いっそう散らかった部屋を目の当たりにして、蘭は愕然とした。

ユリは分類しているのと誤魔化したか、蘭にはただ散らかっているようにしか見えなかった。

蘭の協力もあって、何とかその日のうちに片づけを終えた。

「随分散らかしていたわね」

蘭はくたびれながら肩を叩いた。

「ごめんなさい。でも、おかげできれいになりました」

ユリは、はにかみながら頭を下げた。

外は陽が傾いていた。

部屋に差し込む夕陽はあらゆるものに穏やかさを与えた。

「さて、夕食の準備をしないと」

「私も手伝う」

ユリが言っていると、蘭は愛しそうにユリの肩を抱き寄せた。

「じゃあ、ユリの好物のハンバーグにしようか？」

「やったあ」

ユリは満面に笑みを浮かべながら蘭と一緒に階段を降りていった。

「それにしても、サクラ遅いなあ」

ユリは蘭に聞こえるか聞こえないくらいの声でつぶやいた。

夕食を作り終えてもサクラは帰ってこなかった。

「サクラ、遅いね」

「友達と話でもしているのでしょうか。あなただってこんな時間まで帰ってこないことがあるじゃない」

蘭は気にも留めず、食器を食卓に並べ始めた。すると、玄関のドアが開く音がした。

「ただいま」

サクラの声が聞こえると、ユリはリビングから飛び出した。

「遅かったね」

「うん。皆と話し込んで」

サクラはそのままリビングへ入っていった。

「今日の夕飯は私も手伝って作ったんだ」

ユリはハンバーグを器に盛った。

「へー、怖いな」

「なに？」

サクラが言っていると、ユリは頬を膨らませた。

「それで、今日はどんなことがあったの？」

「あのね。今日学校で……」

蘭が尋ねると、サクラは声を弾ませた。その話をユリは若干の寂しさを隠しながら聞いた。

サクラが話し終わると、ユリは部屋の片付けの話をした。そして、いつもと変わらぬ夜が更けていった。

「明日から学校行ってもいい？」

ユリが蘭の顔を窺うと、蘭はうなずいた。

「顔色も良いみたいだし、今日一日元気だったからいいでしょう」
蘭の言葉を聞くと、ユリとサクラは喜び合った。

タイミングよくレウシアが帰ってきた。二人はその勢いそのまま玄関に飛び出した。

「ただいま」

「おかえりなさい」

二人はレウシアの荷物を持つと、リビングへと向かった。そして、例のごとく同じ話を繰り返した。

思いー1

中間テストが終わり、三週間が経った。学校ではコンテストの話題も冷め、そろそろ期末テストの話題が出始めていた。

ユリとサクラは勉学もトップクラスであり、二人の周りには必然的に人が集まった。

「ここは出るかな？」

「いや、それよりも……」

帰国子女ということと、とりわけ二人は英語を得意としており、放課後には英語を中心に男女問わず、しばし勉強会が開かれた。

「サクラ、数学でわからないことがあるんだけど教えてくれないか？」

オリールは教科書を片手にサクラの横に座った。

コンテストが終わってからしばらく、周囲の人間は二人をカッパルのように扱った。そのため、サクラとオリールが二人並ぶのは自然なことに見えた。

「どこがわからないの？」

「ここなんだけど」

サクラが尋ねると、オリールは教科書を開いて見せた。

時折、世間話を織り交ぜながら勉強会は終始穏やかな雰囲気で行われていた。

「夏休みはどこに行くの？」

一人の女子がオリールに尋ねた。

「俺は祖父と二人でヨーロッパを回ってカナダの家へ行くつもり」

「ヨーロッパにカナダ。……いいなあ」

クラスメイトたちはテレビでしか見たことのない外国の風景を想像した。

「サクラは？」

「まだ何も決まっていないよ」

オリールの問いにサクラは首を横に振った。

ユリはサクラと少し離れた席で友達に英語を教えていた。賑わい話す二人をユリは時折寂しそうに見つめた。

(二人とも楽しそうだな)

ユリは息をつきながら勉強を続けた。

陽が暮れる前にサクラとユリは学校を出た。途中までオリールに送られた二人は、いつまでも笑顔で手を振り続ける彼を尻目に帰っていった。

「まだ手を振っているよ」

「そうだね。ちょっと恥ずかしいよね」

二人は時折振り返ると、恥ずかしそうに笑いながら歩いていった。しかし、ユリはオリールの笑顔が自分に向けられているものではないように感じたため、寂しい表情を滲ませた。

「サクラ、最近オリールと仲いいよね」

ユリは気持ちを隠すように微笑みながら話しかけた。しかし、その類は引きつり、無理をしているのが見え見えであった。

「そんなことないよ。ただコンテストの後、クラスで一番話す機会が多かっただけ。今はその延長かな」

サクラは弁解するように説明した。

「恋愛感情は？」

「ないない」

サクラは手をまごつかせた。その様子を見て、ユリはサクラの思いを汲み取った。

(サクラもオリールが……)

しばらくの間、沈黙が続いた。二人は横に並ぶと、互いの顔を見ることなく歩いていった。

サクラはふいにユリの手を握った。

「テストが終わったら夏休みだね」

重い空気を裂くようにサクラは話を切り出した。

「う、うん」

「どこかに行きたいね」

サクラは穏やかに微笑みかけた。夕陽に照らされたその顔はいつも以上に柔らかく見えた。

「そうだね。パパたちにお願ひしてみようか？」

ユリもつられるように笑顔になった。

「うん」

「じゃあ、何て話をしようか？」

「そうだなあ……」

二人は一本道を歩きながら、レウシアへの話の切り出し方を考えた。

レウシアの帰宅を待つて二人は旅行の話を切り出してみた。

「……ねえ、いいでしょう？」

二人が両手を合わせると、蘭はたちまちため息をついた。

「毎年おばあちゃんの家に行っているじゃない」

「おばあちゃんの家は帰郷。そうじゃなくて旅行に行きたいの」

ユリは食い下がったが、蘭は呆れ顔を浮かべるだけであつた。

「テストが終わる前から何を言っているの？ 早く勉強しなさい」

蘭が冷たく言い放つと、二人は頬を膨らませた。

「オリールはもうヨーロッパに行くことが決まっているのに」

サクラは周りに聞こえないくらいの小声でつぶやいた。しかし、蘭

の耳には確かに届いていた。

「オリール？ まだあの子と関わっているの？」

蘭はコンテスト以来、オリールの話題になると態度を急変させ、顔を強張らせた。

「仕方ないじゃない。同じクラスなんだから」

サクラは慌てて弁解した。

「クラスメイトでも話さない人はいるでしょう？ お願いだから二

度とあの子と関わらないで」

蘭は怒鳴るように二人に言い放つた。二人はたちまち恐縮した。

「蘭、落ち着きなさい。……そうだな、今学期の成績が良かったら旅行を考えるよ」

傍観していたレウシアは蘭の肩に手を乗せた。そして、怯えるようにうつむく二人に話しかけた。

「しかし、パパも仕事が忙しいから、行けるかどうかわからないよ」
レウシアは二人の顔を覗き込んだ。

二人は気持ち落ち着かせた。

「そのときは仕方ないね」

「うん。そうしたら、おばあちゃんの家で我慢する」

二人は互いの目を見ながら小さくうなずいた。

「それじゃあ、この話はおしまい。二人とも勉強しておいで」

レウシアが言うのを聞くと、二人は蘭の顔を窺った。

「ごめんね」

蘭は涙ぐみながら二人に謝った。

「うん。……じゃあ、勉強してくる」

二人は返事をする足早に階段を上っていった。

リビングのドアが閉まると同時に蘭はレウシアの胸に泣きついた。

「しっかりしないか」

「だって……」

「シェリー博士は本当に何もするつもりはないらしい。オールドにも二人の秘密は話していないそうだ」

レウシアは蘭の背中を軽く叩きながら、頭を優しく撫でた。

「今はそうかもしれないけれど、気が変わったりしたら…… それに、彼の言葉が頭から離れない」

「長くは続かないという話か？ それも調べているから大丈夫。カナダの知人にシェリー博士の研究資料を横流ししてもらう手はずは整っている。それを見れば解決するさ」

レウシアは蘭の体を起こすと、両手で涙を拭った。

「もし、どうにもできなかつたら？」

蘭が尋ねると、レウシアは強く首を横に振った。

「何とかするさ」

レウシアはしっかりと蘭の目を見て答えた。

部屋に戻った二人は一緒にユリの部屋で勉強を始めた。そして、きりのいいところで終わらせると、二人でユリのベッドで眠った。

翌朝、二人は蘭のフライパンを叩く音で目を覚ました。

ユリは起きようとしないうさくらの手を引っ張り起こした。そして、昨晚何もなかったかのようにいつもどおりの一日が始まった。

数週間が経ち、二人は無事にテストを終えた。

「テストどうだった？」

さくらが尋ねると、ユリは机に伏せた。

「一応できたけれど…… 疲れた」

ユリが答えると、さくらはクスツと笑った。

「さくらはどうだった？」

「まあまあかな」

さくらは自信満々で答えた。すると、ユリは深く息をついた。

「敵わないよなあ」

「そんなことないって」

「旅行行けるのかな？」

「気が早いって。成績が出てから話をしよう」

さくらはユリの頭に手を置いた。ユリは頭を撫でられた猫のように目を細めた。

翌週からテストの返却が始まった。

「どうだった？」

「うーん。英語はよかったけれど、数学が最悪」

友達同士がテストを見せ合い、ため息をついたり喜んだりした。

すべてのテストが返却されると、掲示板にて学年順位が発表された。

「どれどれ？」

「どうせさくらが一位でしょう。勉強で勝ったことがないんだから」
二人はお楽しみということで互いの点を見せ合わなかった。

二人は掲示板に向かった。結果は案の定さくらが一位でユリが二

位だった。

「ほらね。勝てないんだから」

ユリは悲しさ半分で掲示板を見つめた。その顔を見て、サクラも同様の表情を浮かべた。

「サクラ、一位じゃない」

掲示板を見に来ていたクラスメイトたちがサクラを囲んだ。

「ユリも二位。天は稀に二物も三物も与えるんだね」

「そんなことないって」

クラスメイトの言葉を聞き、二人は照れくさそうに笑った。

「そんなことあるって。サクラなんかコンテストも一位だったじゃない」

「そうそう。羨ましい限りだね」

周りの注目は自然とサクラに集まった。その様子を見て、ユリは胸にしこりがあるような違和感を抱いた。

(何か嫌だな。私って小さい人間だったんだ)

ユリはサクラから一步遠のくと、肩を狭めた。

「ユリは二位？ すごいな。俺なんか八位だよ」

うつむき加減のユリの横からオリールが声を掛けた。

「サクラほどじゃないよ」

ユリがすねるように答えると、オリールは優しく笑いかけた。

「サクラとユリは同じ人間じゃないんだから、比べる必要はないんじゃないかな？」

オリールの言葉を聞くなり、ユリはいつそう複雑な顔をした。

「……同じ人間じゃないか」

ユリは意味深に笑うと、小さく何度もうなずいた。

「そうだね。私は私だ」

ユリが明るく振舞うと、オリールも明るく笑った。

「そのほうがユリらしくていいよ」

「うん。ありがとう」

二人は笑いあった。その雰囲気を感じたクラスメイトは視線をユリ

に向けた。

「なにになに？」

「ユリも二位ですごいなって話」

オリールが答えると、周りは大きくうなずいた。

「本当だよ。コンテストも一票差だし、テストも数点差なんですよっ？」

「そう、三点差」

「うそ。すごいな」

サクラが代わりに答えると、次にクラスメイトはユリを囲んだ。

オリールは縫ってサクラの横に移動した。

「オリールは八位？」

「ああ。一桁ならいいかな」

二人は目を合わせると、自然に笑顔となった。

「ありがとう」

サクラが微笑みながら小声でつぶやくと、オリールは得した気分になって嬉しそうに笑った。

学校が終わると、二人は真っ直ぐ家へと向かった。その歩幅はいつもより大きかった。

「ママ、テストの結果が出たよ」

ユリは玄関を開けると同時に声を上げた。すると、蘭はいつものように笑顔でリビングから顔を覗かせた。

「どうだった？」

「サクラが一位でユリが二位」

二人は玄関を上がるとリビングへと向かった。

「すごいじゃない。よく頑張ったわね」

蘭は二人の頭を撫でた。

「パパに旅行の話をしなとね」

蘭が続けて言うと、二人は目を見合わせてやったあ、と微笑みあった。

「さて、夕食を作らないと。今日は腕を振るっちゃおうかな」

「私たちも手伝う」

二人は甘えるように蘭に寄り添いながらキッチンへと向かった。

レウシアが帰宅すると、二人は出迎えながらテストの話をした。

そして、リビングに戻ると、旅行の話をし始めた。

「……そうだな。二人とも頑張ったみたいだし、会社に休みが取れるか聞いてみよう」

「やったあ」

二人は手を合わせて喜んだ。

「まだ気が早いわよ。パパの休みが取れなかったら旅行はなしだからね」

蘭はレウシアに夕食を運びながら二人に釘をさした。

「わかってる」

ユリは適当に返事をしながら食器を運ぶのを手伝った。

「一応、どこに行きたいか決めておいてくれよ」

レウシアが言うのを聞くと、二人は大きくうなずいた。蘭はレウシアの隣に座ると、幸せそうに笑う二人の顔を見て微笑んだ。

「はいはい、この話はひとまず終了。二人とも早くお風呂に入っちゃって」

蘭は手を叩きながら催促した。

「サクラ、一緒に入ろうか？」

「えー」

サクラは逃げるようにリビングを出て行った。ユリもそれを追うようについて出た。

キャッキヤと騒ぐその様子を、レウシアと蘭は幸せそうに見つめた。

ユリは風呂から上がると、以前買った日本と世界の旅行雑誌を開いて見た。

(どこがいいかな?)

ユリはベッドに寝そべりながらページをめくっていった。

(オールドはヨーロッパとカナダって言っていたよね。ヨーロッパ

は無理だろうけれど、カナダならパパの実家もあるし、行けるかな？)

カナダのページで手を止めた。すると、サクラと出会った公園が頭に浮かんだ。

(……カナダはみんなが嫌がるね。それにしてもサクラって何でいつも私より一歩上にいる感じがするんだろう？ サクラは私の……)

ユリは禁句を頭に思い浮かべそうになり、何度も首を横に振った。

(サクラってオリールのこと好きなのかな？)

あれこれ考えているうちにユリは眠りについた。

ユリは小学校の授業を終えると、急ぎ足でサクラの待つ公園へと向かった。今日、ユリは自分の家にサクラを招待しようとしていた。公園に着くとサクラは一人、ブランコをこいで遊んでいた。

『ごめん、待った？』

ユリが息を切らせながら駆け寄ると、サクラはこぐのを止めた。

『……うつん』

サクラが答えると、ユリはニンマリ笑った。

『じゃあ、行こうか？』

『本当に行くの？』

サクラはなぜかユリの家に行ってはいけない気がしていた。理由はないが、直感がサクラにためらいを与えた。

『もちろんよ。パパとママをびっくりさせるんだから』

ユリはサクラの手を引くと、嬉しそうに駆けていった。

二人は手を繋ぎながらユリの家へと向かった。

『サクラってどこの学校に通っているの？ 年は同じなんだよね？』

『……うん。でも学校には通っていないの。シェリー博士が教えてくれるんだ』

『シェリー博士って、この前迎えに来ていた人？』

ユリが尋ねると、サクラは小さくうなずいた。

『育ての親なの』

『両親は？』

『……知らない』

サクラは冷たい口調で言い放った。

しばらく、二人の間を沈黙が包んだ。サクラはユリの家が近づくにつれて、自然と手を震わせた。

『どうかしたの？』

ユリが心配して尋ねると、サクラは首を横に振った。

『わからない。……何でもない』

サクラは無理に笑顔を作った。ユリはサクラの手を強く握ると、足早に家へと向かった。

家に着くと、二人は不器用な手つきで夕食を作りながらユリの両親の帰りを待った。

夜が更けても両親は帰ってこなかった。

『遅いなあ。ごめんね、サクラ』

『うっん』

サクラはどこかホツとした表情を浮かべた。

『じゃあ、そろそろ帰るね。博士が心配しているといかないから』

サクラは帰る支度をする、玄関へと向かった。すると、玄関のドアが開き、ユリの両親が帰ってきた。

『ただいま、ユリ』

疑うことなく蘭は声を掛け、サクラを抱きしめた。戸惑うサクラの目からは不思議と涙が溢れ出た。

『ユリ？』

レウシアが心配そうに顔を覗かせると、リビングからユリが得意気な表情で顔を覗かせた。

蘭はユリの姿を見ると、抱え込んだ子供から距離を置いた。

『驚いた？ そっくりでしょう？』

ユリの言葉を両親はうわの空で聞いた。

『サクラ、なの？』

蘭は疑い眼で尋ねた。

『えっ？』

サクラとユリは目を丸めた。

『……そうですけど、私を知っているのですか？』

サクラが答えると、両親は目を見合わせた。

レウシアは慌てて玄関のドアを閉めると、とりあえず皆でリビングへと向かった。

『本当にサクラなの？』

『え、ええ』

蘭はサクラの声を聞くだけで、瞳を潤ませた。

『あなたに会えるなんて』

蘭はサクラを強く抱きしめた。そして、席に座ると蘭は険しい表情でサクラに話しかけた。

『話したいことがあるの』

『止さないか、蘭。二人が真実を知るにはまだ早い』

レウシアは必死に静止したが、蘭は聞く耳を持たなかった。

『もう耐えられないのよ。だって、この子は……』

サクラは心のどこかで、やはり来るべきではなかったと感じた。

『この子は、いつまで寝ているの？ 本当に遅刻するわよ』

ユリは蘭に叩き起こされた。

『うーん、起きた』

ユリは寝ぼけ眼で時計に目を遣った。すると、すでに八時を回っていた。

『こんなものを見て夜更かしするようなら旅行の話はなしだからね』

蘭はベッドの横に落ちていた旅行雑誌を取り上げた。

『ごめんなさい』

ユリは飛び起きながら急いで制服を着始めた。

『朝食はどうするの？』

『食べている時間がない。サクラは？』

ユリは制服に着替えるとかばんを開いた。すると、今日の授業の準備がされていた。

『サクラはもう行ったわ』

蘭はため息交じりでユリのパジャマをたたんだ。

『行ってくるね』

『サクラにお礼を言っておきなさい』

ユリはうなずくと、階段を駆け下りた。そして、家を飛び出ると、学校へ走っていった。

ユリは走りながら昨晚見た夢のことを思い出ししていた。しかし、その続きがどうしても思い出せなかった。

（ママ、何て言ったんだろう？ 確かあの日からサクラと暮らし始めて、すぐに引越しをしたんだよね）

ユリは思い出そうとするにつれて、不安な気持ちになっていった。

（まあ、いいか？ 考えるのは止めよう）

ユリは考えるのを止め、無心で走り続けた。

しばらくすると、ユリは電柱の陰に人影を見つけた。

（あの老人。……確か、表彰時にママと話していた人）

ユリは立ち止まり、電柱を見た。すると、上半身だけのその人影は口を何度もパクつかせた。

（もうすぐだ）

ユリの頭に鈍く低い声が響き渡った。そして、人影は静かに消えていった。

（今の何？）

ユリは気味が悪くて手を震わせた。

「……い、いけない。遅刻する」

ユリはその人影を幻であると言い聞かせながら、再び走り始めた。

予鈴と共に教室へ駆け込んだユリは息を切らせながら席へとついた。

「ぎりぎり間に合ったね」

「うん。今朝はありがとうね」

ユリが教科書を用意してくれたお礼を言うと、サクラはニッコリ微笑んだ。

担任が教室に入ってくると、授業が始まった。ユリは今朝見た老人の姿を忘れることができず、気持ち悪さを抱えたまま一日を過ごした。

（ユリ、少し顔色が悪いかな？）

サクラは時折ユリのほうを見て、若干青ざめた顔をしたユリを心配そうに見つめた。

授業が終わると、ユリたちはすぐに家へ帰ることとした。

「来週はユリの誕生日だね」

サクラは早足で歩くユリと肩を並ばせながら声を掛けた。

「うん」

ユリは冷めた口調で返事した。

「オリール誘ってみる？」

「無理だよ」

ユリは終始顔を強張らせていた。

「ねえ、どうかしたの？ 今朝から様子が変だよ」

サクラがユリの肩に手を置くと、ユリは目を見開き立ち止まった。

ユリの目の先には今朝見た老人が立っていた。しかし、今度は全身がはつきりと現れていた。

「朝から付け回して、どういっつもりですか？ 警察を呼びますよ？」

ユリは声を上げた。

「朝？ 何のことだね？」

「とぼけないで」

ユリは老人を睨み付けた。すると、老人は深くため息をついた。

「私は孫を迎えに来ただけだよ。今晚、夕食をする予定だね」

老人は二人にゆっくりと歩み寄った。

「久しぶりだね、サクラ。元気だったか？」

「え、ええ。お久しぶりです、シエリー博士」

サクラは身を震わせながら頭を下げた。その様子を見たユリはサクラの手を強く握った。

「記憶は？」

「五年前にすべて……」

サクラの返答にシエリーは深くうなずいた。

「両親さえ忘れるなんてつらかったろう。すまなかったね。しかし、安心して良い。研究では、この現象は互いが出会ってから十五年が限度らしい。……もう終わる」

シエリーはすれ違いざまにサクラに耳打ちした。

「今朝も言っていたけれど、どういう意味ですか？」

ユリは眉間にしわを寄せながら尋ねた。すると、シエリーはため息交じりにいよいよ首を傾げた。

「たいそうな口を利くものだな」

シエリーはユリに答えると同時にサクラの顔を窺った。サクラの瞳孔は開いており、冷や汗を流していた。

「そうか。本当に何も話していないのか」

シエリーは呆れ顔を浮かべた。

「お前たちの両親との約束だ。私からは何も話さない。どうしても知りたければ両親に聞いてみなさい」

シエリーはユリを見ることなく答えると、学校へと歩き始めた。

ユリが振り返ると学校のほうからオリールが駆けてきた。

「おじいちゃん」

オリールは大きく手を振った。そして、ユリたちに目を遣ると、会釈を交わした。

「どうかしたの？」

オリールがシエリーに尋ねると、シエリーは首を横に振った。

「道を忘れてしまったから、こちらのお嬢さん方に教えて頂いたんだ」

シエリーは振り返ると、二人に頭を下げた。

「二人は俺と同じクラスなんだ。同じカナダ出身でメル・ユリさんとサクラさん」

オリールはシエリーに二人を紹介した。すると、サクラとユリは気まずそうな顔をした。

「オリール、予約に遅れそうだ」

「あ、ごめん。じゃあ、二人ともありがとう」

オリールは二人に礼を言うと、シエリーの手を引いた。

二人はしばらくその場に立ち尽くした。

「何も話していない？ サクラ、どうということなの？」

ユリはサクラに問い詰めた。しかし、サクラは黙ったまま首を横に振るだけであった。

「……ママたちに聞くからいいよ」

うつむくサクラを横目にユリは家へと歩き始めた。

サクラはユリの前に立ちはだかり、両肩を掴んだ。

「きつと聞いてはいけないことだよ。あれは私たち二人を引き裂く悪魔の囁き。信じる気持ちを失った二人は二度と会えなくなるかもしれない」

「何を言っているの？ オルフエウスの話じゃあるまいし」

ユリは苦笑いを浮かべた。しかし、サクラの肩を掴む力が次第に強くなり、冗談で言っているわけではないことがわかった。

「サクラ、やっぱり何か知っているのね？」

ユリはサクラの両手首を強く握った。

「私たち幸せじゃない？ もし、ユリがママたちに尋ねてしまったら、私たちは二度と会えなくなるかもしれない。お願い、聞かないで」

サクラはその場にうずくまった。

「……わかったよ」

ユリはサクラが消えてしまうのではないかと不安に思い、渋々うなずいた。

ユリはサクラの体を起こした。そして、寄り添うように家への帰路を歩いていった。

「お願い、お願い」

「わかっているよ」

うわ言のように繰り返すサクラの背中を擦りながら、ユリは答えた。家に帰るとユリは階段を駆け上がり、自分の部屋へ入っていった。そして、自分の気を落ち着かせるために何度も大きく深呼吸をした。蘭は物音を聞いて廊下へ出た。すると、サクラは涙を瞳に溜めたまま玄関でうつむいていた。

「ケンカでもしたの？」

蘭が尋ねると、サクラは首を横に振った。

サクラは蘭の胸に泣きついた。そして、今日一日の出来事を蘭に告げた。

「シェリー博士はもう終わるって言うていたけれど、どういう意味？」

「そ、それは……」

蘭は目を泳がせたままうつむいた。

「何か知っているんでしょう？」

サクラは蘭の両腕を掴み、すがりついた。

「私はママたちに二人が想い合えば消えることはないと教えられた。互いが悪い感情を抱かない限りは消えないって。……消えちゃうの？」

今にも消えてしまいそうな声で尋ねたサクラを蘭は強く抱きしめた。そして、すべてを話す決心をした。

「落ち着いて聞きなさい。シェリー博士の研究によると……」

蘭はここ数日レウシアが調べていたことをサクラに話した。

動き出した刻―1

一週間が経ち、学校は夏休みに入った。そして、間もなくユリの誕生日を迎えた。

「ユリ、誕生日おめでとう」

「ありがとう。さあ、中に入って」

夏休みということで昼間から続々と友達が集まり始めた。

ユリは礼を言いながら、友達を家の中へ招いた。

食卓には豪華な料理が並んでいた。ところ狭しと並べられた料理はサクラのときよりも若干豪華に思えた。

「今日はありがとう。一杯食べて行ってね」

「はい。ごちそうになります」

蘭とレウシアはユリの友達一人一人にあいさつをして回った。

立食パーティーのように皆は食べ歩きながら友達と会話を弾ませた。

誕生会も終わりを迎える頃、クラスメイトの一人が忍ぶようにユリに歩み寄った。

「これ、オリールからプレゼント」

「えっ、オリールは今日が私の誕生日だと知っているの?」

ユリは決まりが悪い顔をした。

「大丈夫よ。男子禁制だから呼べないって言うておいたから」

「ありがとう」

ユリは笑顔で言うと、プレゼントを受け取った。そのやり取りをサクラは微笑みを浮かべながら見守っていた。

陽が傾き始めると、遅くならないうちに誕生会はお開きとなった。

「今日はありがとうね」

メル家は一家総出で玄関前に並び、手を振った。

「いえいえ。こちらこそ、ごちそうになりました」

「料理おいしかったです」

各々はあいさつを交わすと、目一杯手を振りながら自分の家へと帰っていった。

見送りが済むと皆は家の中へ戻り、蘭とサクラは食卓の片付けをした。ユリとレウシアはプレゼントをユリの部屋へと運んだ。

「あ、それは私が運ぶね」

レウシアが持つプレゼントの一つをユリは大事に抱えた。

「落とさないから大丈夫だよ」

「いいの」

ユリは聞く耳を持たず階段を上がっていった。

ユリはプレゼントを運び終わると、早々にレウシアを部屋から追い出した。そして、早速オリールからのプレゼントを開けた。すると、中には写真立てが入っていた。

「あ、かわいい」

イラストタッチのさまざまな動物が描かれた写真立ては年頃の女の子の心を揺さぶるには十分であった。それが興味のある異性からなら尚更であった。

中にはユリとオリールの二人の顔がアップで写っている写真が入っていた。ユリはオリールの顔を見つめながらニヤついた。しかし、一つの疑問が脳裏を過ぎった。

(この写真、いつ撮ったんだろう?)

日付の入っていない写真を眺めながら、ユリは首を傾げた。

「ま、いいか」

ユリは包装紙を丁寧にたたむと、机の中へと閉まった。

写真を机の上に飾ると、ユリは後片付けを手伝うために一階へ降りていった。

片付けはすでに済んでおり、蘭たちは紅茶を入れてくつろいでいた。

「飲む?」

「うん。もちろ」

顔を覗かせたユリの返事を聞くと、蘭は紅茶を入れに立ち上がった。

ユリが紅茶を受け取ると、四人はリビングでくつろいだ。

ユリは皆の顔を窺った。どうしてもシェリー博士の言葉が気になり、タイミングさえ合えば聞き出そうと考えていたからである。そして、ユリがそのように思っていることは皆が知っていた。まるで騙し合う関係のようにギクシヤクした空気の中、夜が更けていった。話を聞くのは無理だと悟ったユリは、今日は諦めることにした。

風呂に入り、寝る準備を済ませたユリは一足先に自分の部屋へ戻った。

（たぶんサクラも何か知っている。知らないのは私だけ。ドッペルゲンガーであるサクラが知っているのに……）

ユリは家族から差別されている気がして不満に思った。

ユリは写真立ての前に伏せながら眠ってしまった。

『もう耐えられないのよ。だって、この子は私の子よ』

蘭はかん高い声を上げた。二人は蘭の言葉を聞くと、たちまち首を傾げた。

『どうということ？』

ユリが尋ねると、レウシアは深くため息をついた。

『……仕方がない』

レウシアは難しそうな顔をして話し始めた。

『あれはユリが三歳のときだった。ユリとユリに瓜二つの子供が公園で遊んでいた。驚いて私たちが近づくとその子は突如消えてしまった。そして、次の日も次の日も同じ現象が続いた。予てから私たちは人間と関わる超常現象について研究しており、それがドッペルゲンガーではないかと考えた』

『ドッペルゲンガー？』

二人はいよいよ訳がわからなくなった。

『そう。ドッペルゲンガーとはその人の分身のようなもの。それを見たものは数日のうちに死ぬと言われている。このままではユリが死ぬと思い、私たちは上司であるウィリアム・シェリー博士に相談

した。』

シエリーという言葉が聞くなり、サクラは身を震わせた。レウシアはサクラの肩を抱き寄せた。

『シエリー博士は私たちにその子を連れてくるよう指示を出した。私たちはユリを使ってその子を博士の研究室へ誘導すると、博士は二人を隔離して研究し始めた。脳波の測定から感覚の実験、DNA検査などを行ったが一方には何も反応が出なかった。私たちはその存在を人に在らざるものとして、ドツペルゲンガーと確信した。驚くことにその頃から、その存在は独自の意思を持ち始めた。私たちはこの存在に情が移る前に二人を在るべき形に戻すことにした。そして、博士が一方を預かり研究することに同意し、一方は私たちが育てることとなった。』

サクラは研究と銘打たれた実験を思い出し嗚咽した。蘭はサクラの背中を擦ると、強く抱きしめた。

『博士がひどい実験を行っていることを知り、私たちは何度も引き取りたいと願い出たわ。しかし、実際問題として解決策が何もないため、引き取ることができなかった。引取り、私たちの子が目の前で消えるかもしれないと考えると怖くて……』

蘭は下唇をかみ締めた。

『私は消えてもいいから、例え少しの間でも家族と暮らしたい』
サクラの言葉を聞くと、蘭は真っ直ぐ涙を流した。

蘭はサクラを強く抱きしめると、ゴメンね、と何度も何度も言った。

『ドツペルゲンガーを見たら数日のうちに死ぬんでしょ。でも、私たちは何年も生きています。だから大丈夫だよ。私もサクラと暮らしたい』

ユリはレウシアの目を見て言った。すると、レウシアは頭を抱えて考え込んだ。

『あなた。博士の研究でこの子たちのためになるものは、ろくになかったじゃない？　これが最後の機会かもしれない。サクラを連れ

て逃げましょう』

蘭の言葉を聞き、レウシアはいよいよ何が一番よい選択かわからなくなかった。

レウシアは家族と暮らしたいという自分の気持ちを優先することにした。

『……そうだな。二人とも私たちの子だ。とりあえず、蘭とユリは必要最低限の荷物を持って、蘭の両親のところへ行っておいでくれないか？ 私は他の荷物を輸送してもらおうよう手配してから後を追う』

レウシアは不安な顔は見せまいと、表情を強張らせた。

蘭は早速行動を始めた。

サクラは怯えるようにリビングの隅でうずくまっていた。

（博士が帰宅し、私がないことに気づけば、公園へ現れる。そして、公園にいなければ自分がよく遊んでいた瓜二つの少女のことを思い出し、きつと迎えに来る）

サクラは小さな体を震わせていた。すると、ユリは隣に座り、ただ黙ってサクラの手を握った。

蘭は自分とユリの荷造りを済ませると、リビングに戻った。そして、レウシアと抱き合い、しばしの別れを偲んだ。

『先に行っているね』

『ああ。私もすぐに行く』

レウシアは蘭とキスを交わした。

『二人ともママの言うことを聞くんだよ』

『……わかった』

レウシアは子供二人を抱きかかえると、頬にキスをした。ユリは泣き出しそうな声で返事をする、レウシアの頬にキスを返した。しかし、サクラは遠慮していた。すると、レウシアは片目をつむり催促してみた。

『ごめんなさい。私のせいで……』

『いずれはこうなったさ。今まで待たせてすまなかった。……さ

あ、キスをしておくれ』

サクラはレウシアの言葉を聞くと、ぎこちなくキスをした。レウシアは嬉しそうに笑い、サクラの頭を撫でた。

『さあ、行きなさい』

蘭はうなずくと両手に荷物を抱えて家を出て行った。二人も手を繋ぐと後を追って家を出た。

レウシアは閑散とした家の中で、家族の温もりをかみ締めながら荷造りを始めた。

(……そう。それから半月が経ち、パパがおばあちゃんの家に来た。そして、サクラと私たちは暮らし始めた)

ユリは静かに目を開けた。まだ陽が上っておらず、部屋は薄暗かった。

(実に都合のいい記憶だ)

ユリの頭の片隅に鈍く太い声が響いた。

「誰？」

ユリは部屋中を見渡したが、影一つ見当たらなかった。

(よく思い出せ。真実を見て、自分のあるべき姿を取り戻すんだ)

「何を言っているの？」

ユリは壁に向かって話しかけた。

(ならば、私が見せてやろう)

不気味な声が頭に響き渡ると、途端に気配がなくなった。ユリは氣味が悪くて寝付けなくなった。

朝陽が町を赤く染めるのを見ながら、ユリはやつれた顔で起き上がった。

動き出した刻Ⅰ2

一週間が経ち、夏休みの登校日を迎えた。

「オリールに写真立てのお礼を言わないと」

早めに朝食を終えたユリは制服に着替え、リビングでサクラを待った。

「待たせてごめんね」

二階からサクラの声がすると、いつものように階段から落ちる音がした。ユリは呆れ顔で廊下に出ると、サクラは座り込みながら腰を押さえていた。

「大丈夫？」

珍しく痛そうにしているサクラを見て、ユリは心配して声を掛けた。

「うん。大丈夫」

サクラはユリの手を掴むと、ゆっくり立ち上がった。

「じゃあ、行こうか？」

「うん」

二人はそのまま手を繋ぎながら家を出た。

学校に着くとユリは早速オリールを探した。しかし、オリールは旅行のため遅れてくるということと、まだ来ていなかった。

（学校終わっちゃうよ）

登校日は午前中で終わるため、ユリは浮き足立ちながらホームルームを受けた。

ホームルームを終えると、登校日を終えるチャイムが鳴り響いた。

二人は帰る仕度を始めた。

「ちよつとトイレに行ってくるね」

「うん」

サクラが教室を出て行くと、ユリは校門を見つめていた。

（結局来なかったな）

ユリは軽いため息をついた。

サクラがなかなか戻ってこないため、ユリは心配してトイレに向かった。すると、職員室へ続く渡り廊下で話しているサクラとオリエールを見かけた。

「来ているんじゃない」

ユリはオリエールを驚かそうと背後に周り、ゆっくりと歩み寄った。

「……で、今度はすぐにカナダへ？」

「ああ、明日の夕方に発つんだ。……そういえば、写真立ては気に入ってくれた？」

オリエールの言葉を聞き、ユリは柱の陰で立ち止まった。

「えっ？」

「ほら、先週の誕生日のプレゼントで上げたやつ。コンテストのときに撮ってもらった写真を入れておいたんだけど」

サクラは首を傾げた。

オリエールはサクラとユリの誕生日を違えていた。そのことに気づくとサクラはたちまち気まずい顔をした。

「何？」

「先週はユリの誕生日なのよ。写真でオリエールが誕生日を間違えたことを知ったら、ユリはきつと傷つくわ」

オリエールもまた気まずい表情を浮かべた。

「どうしよう」

オリエールは頭を掻いた。二人はどうすればいいかあれこれ考えたが、過ちを無きものにすることはできるはずもなく、何一つ解決策は思いつかなかった。

しばらくの間沈黙が続いた。

ユリはただ目を丸くした。

（……あの写真、私じゃないの？）

ユリは写真を思い出した。疑うことのなかった自分の姿を心寄せていた人に否定された気がして、肩を落とした。

ユリはかばんも持たず覚束ない足取りで学校を後にした。

（私じゃない？ 私が本物なの？）

ユリはつぶやきながら家へと向かった。

家へ着くと、ユリは黙ったまま自分の部屋へ入っていった。そして、写真立ての写真を見つめた。

(どう見ても私じゃない)

ユリは何度も鏡の中の自分と写真の中の人物を照らし合わせた。納得のいかないユリはアルバムを開いた。

(この写真は私?)

自分の姿を指差しながら、ユリは首を傾げた。

(……気持ち悪い)

ユリは自分の腕を握り締めると、体を震わせた。

ユリが家に着く頃、サクラとオリーは教室に戻った。サクラはユリのかばんがあるのに姿がないことに疑問を持った。

サクラは急いで下駄箱を覗き込んだ。

(もしかして、聞かれていた?)

サクラはユリと自分のかばんを持つと後を追った。

家への途中、サクラは電信柱の陰に人影を見つけた。

(ユリ?)

その人影は憎悪を伝え、すぐに消えてしまった。サクラは顔を見るこゝろがなかったが、直感的にユリのような気がした。

(そんなこと……)

サクラは足を振るわせながらも急ぎ足で家へと戻った。

玄関を開けると、サクラは真っ直ぐユリの部屋へと向かった。そして、部屋のドアを開けると、ユリがアルバムの前で腰を下ろしていた。

「ユリ?」

サクラは優しい口調で声を掛けた。しかし、ユリは何の反応も示さなかった。

二人の様子がいつもと違うのを感じ、蘭もユリの部屋に来た。

「どうかしたの?」

蘭の声を聞くと、ユリはアルバムを指差した。

「どれが私？」

ユリは声を震わせながら尋ねた。

「ど、どれもユリじゃない」

蘭は動揺したように答えた。すると、ユリは机の上の写真を指差した。

「あれは？」

「……ユリじゃないの？」

蘭が答えると、ユリは何度も首を横に振った。

「仕方な……」

「気持ち悪いよ」

サクラの言葉を遮るようにユリが小声でつぶやいた。

「双子でもないのに、同じ顔しているなんて……気持ち悪い」
涙がアルバムの上に落ちていった。

「何てことを言うの？ 一体、どうしたの？」

蘭はユリの肩を揺すった。

「どうかしているのは皆だよ。ドッペルゲンガーと暮らすなんて……」

……

「やめなさい」

蘭は大声で怒鳴りつけた。そのやり取りを見ながら、サクラはゆっくり後ずさりをした。

「サクラ？」

「ごめんなさい。私、部屋にいるね」

蘭が目を遣ると、サクラは必死に笑顔を作った。しかし、堪えられない涙が頬を伝った。

サクラは自分の部屋に駆け込むと、ドアが開かないよう机を動かした。

蘭はひとまずユリとの話を優先することにした。

「どうして突然こんなことを言い出すの？」

蘭は悲しい目でユリを見た。それに耐え切れず、ユリは涙を流し始めた。

「だって、ドツペルゲンガーであるサクラのほうが、勉強ができて、人気もあるんだ。私の好きな人はきつとサクラのことが……」

ユリは言葉を詰まらせた。すると、蘭は優しくユリを抱きしめた。

「サクラは何でもあなたに譲ってきたでしょう？ そのおかげで少しユリより大人なだけ。たまたま落ち着いた人が人気を持つ年頃なのでしょう」

「でも……」

ユリはサクラとの思い出を思い返した。すると、人一倍優しく微笑みかけるサクラの顔ばかり思い浮かんだ。

「サクラが嫌い？ 憎い？」

蘭が問いかけると、ユリはそういうわけじゃないと首を振った。

「……ユリ、あなたがサクラに憎しみを持つと、サクラは消えてしまいかもしれないの」

蘭は苦渋の思いで話をした。

「どういうこと？」

「そのままの意味よ。私たちが過去の事例を調べ、今の状況に当てはめたところ、あなたがサクラに負の感情を強く抱くと、サクラに悪影響を及ぼす」

ユリは突然の言葉に目を丸くした。

「ケンカをするのは構わないわ。家族ですもの仕方が無いことかもしれない。でも、お願い。サクラを憎むのはやめて」

蘭はユリの両手を強く握り締めると、その手に額を当てた。

ユリは聞きたいことが山ほどあったが、この場は黙ってうなずいた。

「サクラに謝ってくる」

ユリは力の入らない足を何とか立たせ、サクラの部屋へと向かった。

「サクラ、ごめんね。ごめんなさい」

部屋のドアを叩くと、ユリは何度も謝った。しかし、部屋から返事が聞こえることはなかった。

(……サクラ)

ユリはドアに頭をつけた。

「今はそつとしておきましょう」

「う、うん」

蘭はユリの肩を抱き寄せると、階段を下りていった。

夕食のときもサクラは部屋から出てこなかった。

「私にご飯持っていく」

ユリは部屋に食事を持っていくこうとする蘭の裾を掴んだ。

「そ。じゃあ、お願いね」

蘭は食事の乗ったお盆を手渡すと、ユリの頭を撫でた。

ユリは食事を溢さないようにゆっくりと階段を上がっていった。

そして、部屋の前まで行くとお盆を置いてドアを叩いた。

「……サクラ」

ユリは声を震わせながら声を掛けた。

「ごめんなさい、サクラ。あの…… ご飯ここに置いておくから食べてください」

言い訳の言葉も見つからないユリは、自分の言動を悔いながら階段を降りていった。

「どうだった？」

廊下で蘭が尋ねると、ユリは涙を目に溜めて首を横に振った。

「大丈夫よ」

蘭は優しくユリを抱きしめると、サクラの部屋を見つめた。

一時間ほどが経ち、レウシアが帰宅した。そして、蘭から状況を聞くと、深くため息をついた。

「ごめんなさい」

「いずれこうなるとは思っていた。しかし、何とも時期が悪い」

レウシアはうつむくユリの前で頭を抱えた。

「どういうこと？」

ユリが尋ねると、レウシアは落ち着いた表情でユリを見た。しかし、レウシアの目が冷やかな感じがして、ユリは身を強張らせた。

「二人は知らなくていいことだ」

レウシアは冷たく言い放つと、席を立った。そして、階段を上り、サクラの部屋へ向かった。ユリも恐る恐るレウシアの後についていた。

部屋の前には手付かずの夕食が置かれていた。

「サクラ、入るよ」

レウシアはドアを強引に開けた。しかし、ドアの前に机が移動されており、開けずにいた。

「サクラ、開けなさい」

レウシアはわずかに開いた隙間から呼びかけたが、中からは物音一つしなかった。

不安になったレウシアは蘭と協力してドアをこじ開けた。

「サクラ？」

三人が部屋に入ると、薄暗い部屋の中でベッドが膨らんでいるのに気づいた。

「サクラ？」

蘭は声を掛けながらベッドに近づいた。すると、布団が小さく震えていた。

蘭は布団を取り払った。サクラはうずくまりながら涙を流していた。

「怖かったんだ」

サクラは声を震わせていた。

「大丈夫よ」

蘭はサクラを抱きかかえると、強く抱きしめた。

「消えないといけないの？」

サクラが涙をこぼすと同時にユリも涙を流した。

「そんなことはない」

レウシアはユリを抱き寄せると、サクラのもとに歩み寄った。

「でも、博士は十五年が限度だって言っていたし、そのすぐ後にこんなこと……それに家に帰るとき、ユリに憎まれているのが伝わってきたの」

「やめなさい」

レウシアは怒鳴りつけるように声を上げた。すると、サクラは恐縮して黙り込んだ。

しばらくの間沈黙が続いた。雨の屋根を叩く音が聞こえ始め、風の窓を叩く音が部屋に響き渡った。

「ごめんなさい」

ユリは重い空気の中、口を開いた。そして、サクラに抱きついた。

「ごめんなさい。サクラが消えなければいけないなら、その前に私が消えるから」

「何言っているの？ そんな風に残っても少しも嬉しくない」

二人は互いを強く抱きしめた。その姿を見て、蘭は堪えられずに涙を流した。

皆が落ち着くと、リビングに下りてきた。

「二人は今まで通り仲良くしてくれればいい。必ずパパが何とかするから」

レウシアは二人に向かって言った。すると、二人は互いの目を見て笑い合った。

「わかった」

二人がうなずくと、レウシアも微笑みを浮かべながら大きくうなずいた。その横で蘭は静かに涙を流した。レウシアは泣いてばかりだと蘭の頭を小突いた。

レウシアとサクラは一緒に夕食を食べた。ユリは横でテレビを見ながら、時折二人のおかずをつまんだ。

一転して穏やかな夜が更けていった。しかし、ユリは何かを覚悟したように窓に映った自分の姿を見つめていた。

（オリーは明日の夕方、カナダに発つて言っていた。その前にシェリー博士にあつて、すべてを聞こう）

ユリは窓を開けると、手を伸ばし雨に触れた。しかし、その手が冷たさを感じることはなかった。

（……私がドツペルゲンガーですか？）

雨音がユリの部屋に寂しく響き渡った。

真実―1

あまり眠れぬままユリは夜明けを迎えた。

ユリは名簿でオリールの住所を調べると、家族が目覚ます前に家を出た。

雨は夜中のうち上がり、蒸し暑い一日が始まった。

(すべてを知るんだ。何を言われても大丈夫。覚悟はできている)

ユリは一度振り返り、家を見上げた。

(帰ってこられるよね)

ユリは大きくうなずくと、再び歩き始めた。

三十分ほど歩くと、ユリはようやくオリールの家についた。オリールの家は木造のカナダからの輸入住宅であり、ユリは若干の懐かしさを感じた。

(いよいよだ)

ユリは恐る恐るインターホンを鳴らした。

「どちら様？」

玄関が開くと、オリールが顔を覗かせた。

「おはよう」

「や、やあ。こんな朝早くどうしたの？」

ユリが頭を下げると、オリールは一瞬目を泳がせた。

「ユリだけれど、シエリー博士はいる？」

オリールがユリかサクラか迷っているのを察すると、ユリはすぐさま名乗った。

「あ、ああ。研究室にいるよ。……どうぞ」

オリールはユリを中に招いた。ユリは微笑みながらうなずくと、家の中へと入っていった。

「研究室は地下にあるんだ」

オリールが話しかけてもユリは顔を強張らせたまま返事をしなかった。

「おじいちゃんにどういった用で来たの？」

「尋ねたいことがあって来たの。悪いけれど、部屋に入ったら席を外してもらえる？」

ユリの言葉を聞くと、オリールは寂しそうな表情を浮かべた。

「ごめんね」

ユリは自分の接し方が冷たいことに気づいて、穏やかな顔で詫びた。

「ううん。わかった」

オリールは笑顔で答えた。

オリールに案内されると、ユリは研究室のドアの前に立った。

「じゃあ、俺はリビングにいるから、何かあったら呼んで」

「うん。ありがとう」

オリールはユリが思いつめた顔をしているのを気がかりに思った。

しかし、そのことを問うことはなく、オリールは階段を上っていった。

ユリはドアの前で大きく深呼吸すると、ドアを叩いた。

「オリールか？」

「いえ、メル・レウシアの娘ユリです」

ユリが答えると、少し間が空いた。

研究室のドアが開くと、シエリーが顔を出した。

「入りなさい」

ユリは深くうなずくと、鼓動を高鳴らせながら中へと入った。

研究室の真ん中には大きめの机があり、周りは多くの本で囲まれていた。

「何の用だね？」

シエリーは研究室の中を物珍しげに見ているユリに対し、冷たい口調で尋ねた。

「お忙しいところすみません」

「構わない。それより何の用だね？」

シエリーは常に冷めた表情でユリを見ていた。ユリは嫌でも自分が好かれていないことを察した。

「私の前に現れたとき、もうすぐだ、もう終わると言いましたね。あれはどういう意味ですか？」

ユリは単刀直入に尋ねた。

「両親には聞かなかったのか？」

「ええ。両親はこの手の話を拒みますので」

シエリーはため息をついた。

「愚かだな」

呆れ顔で首を振るシエリーの前でユリは首を傾げた。

「お前の両親には私からは何も告げないと約束してあるのだが……」
シエリーはユリの覚悟を決めた目を見ると、いいだろう、と小さくうなずいた。

「己のドツペルゲンガーを見た者は数日のうちに死を迎える。これはシヨックを受けたことにより、精神がおかしくなることが原因であると思われる。と、なればその者の精神力によつては死なない人間や数年後に死ぬ人間もいる。おそらくこのような人物はドツペルゲンガーとは関係のない死を迎えるのであろう」

「死なない人間？」

ユリは期待に胸を膨らませた。このまま一緒に暮らせるのではないかとさえ思った。

「お前たちのように一緒に暮らすという事例は未だなく、私はサクラを失つてからも興味本位で研究を続けた。この現象をオートスコピイ、すなわち自己像幻視という精神病の一種とする考えもあれば、超自然的現象とする考えもある」

シエリーは分厚い資料を取り出し、机の上に置いた。

「概念的な面にも惹かれたが、私が最も惹かれたのは、ドツペルゲンガーは十五年をめどに消滅するという説であった。精神病の治癒される期間を指すのか、超自然的現象が自然に還ることを意味するのかはわからないが、ドツペルゲンガーを見て生き延びた人間は初めてそれを見たときから十五年以降、それを見ていないという」

シエリーは資料を開き、ユリに見せた。ドイツ語で書かれたその資

料をユリは読み取ることができなかったが、添付されている双子の
ような写真を見て胸騒ぎがした。

突然研究室のドアを叩く音がした。

「オリールか？」

「博士、レウシアです」

ユリはその名を聞くと、思わず目を泳がせた。

「入りなさい」

博士が返事をする、間もなくドアが開いた。

息を切らせながら部屋に入ってきたレウシアは悲しい顔をしてい
た。

「なぜ黙って博士を訪ねた？」

「パパたち、嫌がるでしょう？」

レウシアは呼吸を整えながら深くうなずいた。

「もちろんだ。お前たちは知らなくて良いことがたくさんある」

「それが愚かだと言うのだ。当人に隠し通せる訳なかるう」

シエリーは口を挟んだ。

「話の続きをお願いします。本当にどちらかが消えないといけない
のですか？」

「正しく言うならば、ドツペルゲンガーが消えるか、本人が消えて
ドツペルゲンガーの行方はわからなくなる」

シエリーは続けて言う、ユリは首を傾げた。

「わからなくなる？」

「ああ。消えるか、この世を彷徨うか。……幽霊とはその姿を言
うのかもしれないな。どちらにしてもドツペルゲンガーは直に消
えるのだらう」

レウシアは納得できず、何度も首を振った。

「もういいだらう。ユリは帰りなさい」

ユリがレウシアの言葉に耳を貸すことはなかった。

「ドツペルゲンガーとは元々在るべき者ではない。私はドツペルゲ
ンガーが消えるべきであると思うがね」

「なぜ在るべき者ではないと決め付ける？ 存在したからには意味があるはずだ」

レウシアは怒鳴るような口調でシェリーに言い放った。すると、シェリーは呆れ顔で首を横に振った。一方でユリはレウシアの言葉に胸を打たれ、瞳に涙を溜めていた。

長い沈黙が続いた。空気が重くなり、ユリは最も問いたかったことを聞き出せずにいた。

「とにかく、私はどちらにも消えずに済む方法を探します。博士、何かわかったら連絡ください」

沈黙を裂くように言うと、レウシアは深々と頭を下げた。

「愚かだが、愛弟子の頼みだ。いいだろう」

シェリーは深くため息をつきながら答えると、資料を棚に戻した。

「行くぞ、ユリ」

レウシアはユリの手を掴むと、強引に部屋を出ようとした。しかし、ユリはその手を振り払い、シェリーの背中を見つめた。

「博士」

ユリのうわずった声を聞くと、シェリーはゆっくりと振り向いた。

ユリは口をまごつかせた。自分の存在自体を問うことはユリに恐怖と不安を与えていた。

「……わ、私がドッペルゲンガーですか？」

ユリはやっとの思いで一言口にした。

時間が止まったように、静寂が辺りを包んだ。

「バカな……」

「サクラではなく、私がドッペルゲンガーですか？」

ユリは張り詰めた糸が切れたように涙を溢しながらシェリーに尋ねた。

シェリーはレウシアの顔を窺った。レウシアはユリの死角ですが、る様に首を横に振った。

「誕生日辺りから時々ご飯の味がしないの。自分の手を抓っても痛くないの。雨に濡れても冷たくない。小学校三年生より前の記憶も

ない」

ユリはその場で座り込んだ。

「レウシアよ。真実を教えてやるがこの娘の救いになるとは思わないか？」

シエリーはユリに歩み寄った。レウシアはその横で静かにつつむいた。

「お前がドツペルゲンガーだ」

シエリーはユリの肩に手を置き、冷静な表情で答えた。それと同時にレウシアは悔しそうに歯をかみ鳴らした。

「サクラに会ったときの記憶は？ パパたちはサクラに向かって、サクラがドツペルゲンガーだって……」

「おそらく、それはお前が自分の都合が良いように作り変えたものだろう。よく思い出してみるといい」

ユリは両手を床につき、涙を溢しながらサクラを家に招いた時のことを思い出した。

『あれはサクラが三歳のときだった。サクラとサクラに瓜二つの子供が公園で……』

『……私たちはサクラを使ってその子を博士の研究室へ誘導すると……』

ユリは自ら歪曲した記憶の真実を知った。

「サクラは知っているの？」

「幼いときのサクラの記憶は、特殊な装置で作り変えたが、五年前にすべての記憶が戻ったそうさ。他の記憶はお前が勝手に歪曲しただけだしな。……研究のためとはいえ、あの子には悪いことをした」

シエリーは遠くを見つめた。

「なぜサクラを隔離したの？ ドツペルゲンガーである私を調べたほうが……」

「最初はそのつもりだった。しかし、お前からは何も出てこなかった。細胞やDNAはおるか、血さえでなかったのだ。実体はあるが存在はしない。そんな者をどう調べればいい？」

ユリは転んでも血を流した覚えがなかった。すると、一瞬で血の気が引いた。

「しかし、不思議な存在だ。肉体のようなもので形成され、涙のようなもの分泌されている。……それは水か？」

シエリーは胸を弾ませながら分析をしていた。

レウシアは居ても立ってもいらなくなり、ユリの体を抱き起こした。

「ユリ、帰ろう」

ユリは穏やかに微笑みかけた。

「パパ、ごめんね。でも、安心して。……私が消えるから」

「バカなことを言うな。これからも今までどおり暮らすんだ。さあ、帰るぞ」

レウシアが怒鳴ると、ユリは真っ直ぐ涙を流した。

レウシアはユリの手を強く握ると、研究室を出て行った。

（パパ、ごめんね）

ユリは繋いだ手の温もりを感じることができず、また、強く握られた手が痛く感じなかった。

真実―2

二人はシエリーの家を出た。オリールの顔をまともに見ることができなかつたユリは、小さく頭を下げた。

(存在したからには意味がある。いい言葉だ。しかし、私たちの存在している意味は……)

鈍い声がユリの頭に響いた。

ユリはレウシアの手を離すとシエリーの家のほうへ振り返った。

そこには昔カナダの公園で見た、サクラを迎えに来た中年の姿があった。

「シエリー博士？」

レウシアはユリの言葉を聞き振り返った。すると、シエリーの家の前には年齢こそ若いものの確かにシエリーの姿があった。

(真実を知り、何を想う?)

(べ、別に何も想わない。今までどおり過ごし、刻が来たら消えるわ)

ユリは戸惑いを浮かべながらも頭の中でその存在と会話した。

(我々が消えなければならぬと、なぜ決め付ける？ 我々が本物で片側が偽者かもしれないのだぞ)

(どちらが本物かなんて関係ない。私はサクラに生きていて欲しい)

ユリは堂々とした面持ちで想いを伝えた。すると、その存在は呆れ顔を浮かべた。

(愚かだな。好きにするといい)

その存在はシエリーの家へと入っていった。

ユリもレウシアとともに急いでシエリーの家へと戻った。

「どうしたの？ 忘れ物？」

勢いよく入ってきたユリを見て、リビングに居たオリールは目を丸くして尋ねた。

「ごめんね。勝手に入ってきて。博士はまだ研究室？」

「あ、うん」

オリールの言葉を聞くと、ユリは研究室へ目を向けた。

研究室で何か割れる音がした。

「何の音？」

あたふたするオリールを尻目にユリとレウシアは慌てて研究室へ入っていった。

研究室には机の横で腰を抜かしたシエリーの姿があった。

「博士？」

レウシアが声を掛けると、シエリーはレウシアの横にいたユリを睨み付けた。

「化け物め。仲間を呼んだな」

ユリは辺りを注意深く見回した。すると、本棚の前に壊れた電気スタンドが落ちていた。

「私を殺しても何一つ解決しないぞ」

「そ、そんなつもりは……」

ユリは慌てて首を横に振った。

電気スタンドの上に、一昔前のシエリーの上半身が浮かび上がった。

「何が望みだ？」

シエリーが尋ねると、その存在は含み笑顔でシエリーを見下した。

（お前が存在する限り、私の存在は影となる）

ユリとシエリーの頭にだけ声が響いた。

「当然だ。貴様は存在すべきものではないだろう」

シエリーは自分の体を後方へ引きずらした。

（なぜ決め付ける？ お前の記憶はお前が勝手に創ったものかもしれない。お前の感情もまた勝手に創ったのかもしれない。感覚も流れる血も……）

シエリーはその言葉を聞きながら、頭が錯乱し始めた。

「何を言っている？ そんなわけないだろう」

冷や汗をかくシエリーの姿を見て、その存在は満面に笑みを浮かべ

た。

（お前は本当に生きているのか？ 私を見る。この少女を見る。本物とされている者とどこが違う？ 私の存在を否定することはお前の存在を否定することだとわからないのか？）

その存在がユリを指差すと、ユリは黙ってうつむいた。

「もう止めて」

ユリは悲鳴に近い声を上げた。

（愚かな娘だ。……まあ良い。今回はこれくらいで消えるとしてよ
う）

その存在はニンマリ笑うと、空気に溶け込むように消えていった。

ユリの声を聞き、オリールが部屋に入ってきた。すると、その存在は静かに消えていった。

「大丈夫？」

オリールは一瞬見えた人影より、ユリの様子を気にかけた。ユリは青ざめた顔で小さくうなずいた。

シェリーは近くにある本棚から本を取り出すと、ユリに向かって投げた。

「出て行け。二度と顔を見せるな」

「おじいちゃん？」

オリールは腰を抜かしたシェリーを見つけると、駆け寄った。

「レウシア、お前もだ」

シェリーは鬼のような形相で言い放った。

「……わかりました」

レウシアはユリの手を引いた。しかし、力の入らないユリはその場で座り込んだ。

「ユリ」

「オリール。二度とあれに近づくな」

駆け寄ろうとするオリールの手を掴むと、シェリーはオリールを睨み付けた。オリールはたちまち恐縮し、その場で立ち止まった。

レウシアは黙ったままユリを抱き上げた。

「私たちの家へ帰ろう」

レウシアが優しく声を掛けると、ユリは涙を流し始めた。

「うん」

ユリは声を震わせながら返事をした。

ユリはしっかりとレウシアの背中に掴まると、二人はシエリーの家を出て行った。その後姿をオリールは歯がゆそうに見つめていた。

「どうしてあんなことを言ったの？ 彼女は僕の大切な……」

「あれは人間ではない」

シエリーはオリールの言葉を遮った。

「何を言っているの？」

「一刻も早くここを出よう。飛行機の中で話す」

シエリーはオリールの肩を借り、ゆっくりと立ち上がった。そして、旅行のために荷造りしてあった荷物に研究資料などを入れなおした。

オリールは疑い眼でシエリーを見ながらも、渋々仕度をし始めた。

ユリは疲れたのか、レウシアの背中であつらうつらうつらし始めた。それを察したレウシアは背中を優しく揺らしながら、昔ユリに歌った子守唄を歌い始めた。ユリは懐かしさが込み上げ、照れくさそうに笑った。

「懐かしい」

かえって眠気が覚めたユリは背中に強くしがみつくと、一緒に歌いながら帰っていった。

家の前に着くと、ユリは背中から降りた。

「今までもこれから何も変わらない。私たちは家族だ」

「うん。わかっている」

二人は玄関前で立ち止まると、互いの目を見て小さくうなずいた。

玄関のドアを開くと、朝食の香りが漂ってきた。

「おかえりなさい」

ドアが閉まると同時に蘭がキッチンから顔を覗かせた。そして、二人の顔を見ると、ユリがすべてを知ったことを悟った。

「ただいま」

健気に笑うユリの姿が両親の心を深く打ち付けた。

「おかえり。ご飯できたからサクラを起こしてくれる？」

「はい」

ユリは元気に返事をする、階段を駆け上がった。

「ユリは知ってしまったの？」

「ああ」

恐る恐る尋ねた蘭は、レウシアの言葉を聞いて愕然とした。そして、二人は顔を曇らせた。それからレウシアはシェリーの家であったことを簡単に蘭に説明した。

ユリはサクラの部屋に入ると、ベッドで眠るサクラの前で立ち止まった。

（本当によく似ている）

ユリは目の前にいる自分と瓜二つの存在を見て、複雑な顔をした。

（……私が偽者）

ユリがサクラに向かって言った気持ち悪いという言葉がそのまま自分に返ってきた。

「サクラ、朝だよ」

サクラの肩を揺するユリは、その手が首に向かう衝動に駆られた。

（信じられない。私、何を考えているの？）

ユリは自分の震える両手を見つめた。

サクラは目を覚ますと、ゆっくり体を起こした。

「おはよう」

サクラの声を聞くと、ユリは我に返った。

ユリは咄嗟に両手を後ろに隠した。

「お、おはよう」

ユリは慌てて笑顔を作った。

「朝ご飯できたって」

「そう。じゃあ、起きようかな」

ユリが手を差し出すと、サクラはその手を掴み立ち上がった。

二人がリビングに入ると、食卓には湯気たった朝食が並べられて

いた。

「おいしそう」

ユリは真つ先に自分の席に着くと、おかずの一品を指で掴み食べた。
「うん、おいしい」
ユリは先に座っていた両親に微笑みかけた。

サクラもつられるように席に着くと、同じようにおかずを食べた。
「うん、おいしい。でもいつもよりしょっぱいね」

サクラが言うと、一瞬空気が重くなった。

(……今日も味がしない。もう疑いようがないのかな)
ユリは静かにうつむいた。

「そ、そう。でもおいしいじゃない」

蘭は慌てて言うと、他のおかずを二人によそおい始めた。

味覚がほとんど無くなってもおいしそうに食べるユリを見て、蘭は目を潤ませた。

「ばか、泣くんじゃない」

レウシアは二人に聞こえないよう、小声で蘭に言った。すると、蘭は小さく何度もうなずいた。

朝食を終えると、四人はリビングにあるテレビの前でソファに座った。

「旅行はどこに行きたい？」

レウシアが尋ねると、ユリとサクラは一斉にレウシアのほうへ顔を向けた。

「休み取れるの？」

「ああ。今の仕事が終わったら休みをもらえることになった。一週間後か二週間後になるけれど、早く終わらせるからどこかに行こう」
レウシアは二人に微笑みかけた。

「どこにする？」

サクラが尋ねると、ユリは旅行雑誌の内容を思い浮かべた。

「海外？ 国内？」

サクラが尋ねると、ユリは両親の顔をジッと見た。

「私、カナダに行きたい」

ユリの言葉を聞くと、両親は目を見合わせた。

「それは駄目だ」

レウシアは慌てた様子で答えた。それに合わせて蘭は何度もうなずいた。

重い空気が張り詰めた。その中でユリは決して目を逸らすことなくレウシアの目を見ていた。

「……私なら大丈夫だよ。だからカナダへ行こう」

「そうじゃないんだ」

張り詰めた空気を裂くようにサクラが口を開いた。しかし、レウシアは睨み付けるようにサクラを見た。

「ごめんね、サクラ。あなたにはつらい思いをさせてしまった」

ユリの言葉を聞いてサクラはハツとした。

「もしかして……」

「十五年が過渡期なんだって。私、消えるんだって」

沈黙が続いた。すると、突然ユリは自分のことを鼻で笑った。

「ドッペルゲンガーなんかにされていたんだから辛かったよね」

ユリは明るい口調で続けた。すると、他の三人はたちまちうつむいた。

「辛くなんてないよ。ユリがいてくれて心強く思ったし、今だって幸せなんだから」

サクラは悲しい顔をしながら訴えかけるように言った。それを聞くと、ユリは何度もうなずいた。

「私もだよ。幸せだよ」

ユリはサクラのほうを見て微笑むと、ユリは再度レウシアのほうへ振り返った。

「大丈夫だから。だから……」

「駄目だ」

レウシアは断固として譲らなかつた。カナダへ行ったらユリと別れなければならぬ気がしたからである。サクラも蘭も同じ気持ちで

あった。

「二人とも消える必要はない」

レウシアは強く言うと言席を立った。

「どこへ行くの？」

「部屋で博士の研究データを分析している」レウシアは蘭に答えると、顔を強張らせたまま部屋へと戻っていった。

残された三人はただうつむいた。

「二人とも？」

一つの疑問をサクラは口にした。

「私が消えればユリは助かる？」

ユリは首を横に振った。

「そうじゃないの。あなたと私が消えるか、私が消えるか」

ユリが答えると、蘭は静かにうつむいた。

「どういうこと？」

「博士の家で聞いたこと、起こったこと、一から話すわ」

ドッペルゲンガーについてシェリーに聞いたことから、ユリがドッペルゲンガーであることを知ったこと、シェリーのドッペルゲンガーが現れたことなど、ユリは落ち着いた顔をして坦々と話した。しかし、サクラはその顔がどこか哀愁を帯びているように感じた。

話を聞き終わると、サクラは遠くないだろう別れを感じ愕然とした。

「……どうしよう」

「仕方ないよ。刻が来るまで今まで通りに暮らして、刻が来たら私は静かに消える」

ユリは心を決めていた。その姿を見てサクラは言葉を失った。すると、蘭が二人に歩み寄った。

「大丈夫よ。何か打開策があるはずだから」

蘭は二人の頭を撫でた。ユリは子猫のように手のひらに頭をすり寄せると、蘭に抱きつき甘えた。

「パパを信じているよ。でも、こう言っておいたほうが、気が楽な

の

「……大丈夫だから」

ユリは本音を洩らした。蘭はユリを抱きしめると、サクラも抱き寄せた。そして、二人は蘭の腕の中で目を合わせると、互いの気持ちをごまかす様に笑った。

四人で昼食を食べ終わると、ユリとサクラは各々の部屋へ行き、両親はレウシアの部屋でデータの分析を行った。

夕食後も同じことが繰り返された。時折ユリとサクラはともにテレビを見たが、その他は各々の部屋で過ごした。そして、二人は夕食後に両親の顔を見ることはなかった。

(私のせいで家族は疎遠になってしまった。限られた時間、少しでも長く居たいのに)

ユリは部屋で一人、気を沈めた。

存在

ユリが真実を知ってから一週間が経った。

両親は相変わらず部屋に籠もり研究をしていたため家族揃って顔を合わす機会派食事のときくらいになっていた。

ユリは夜明け前に目を覚ますと、陽が部屋に差し込むのを窓辺に立って待った。

「この部屋で何度朝陽を眺めることができるのかな？」

ユリは次第に空が赤く染まる様子を眺めた。

リビングで電話が鳴り響く音がした。

（まだパパたちは寝ているかな？）

ユリは音を立てないように部屋を出ると、階段を下りていった。

「……わかった。また、何かあったら知らせてくれ」

ユリがリビングのドアに手をかけると、レウシアの声が洩れてきた。

「どうしたの？」

蘭が尋ねると、レウシアは表情を曇らせた。ユリは聞き耳を立て、

二人のやり取りを廊下で聞いた。

「心不全で博士が倒れたそうだ。息を引き取るのも時間の問題らしい」

蘭は腰を抜かした。

「それってドッペルゲンガーの……」

「滅多な事を言うな。博士はもう年だったんだ」

「だって、タイミングが良すぎるじゃない」

蘭は金きり声を上げた。

「静かにしなさい。子供が目を覚ます」

レウシアは蘭を小声で怒鳴りつけた。

「それに、ドッペルゲンガーのせいだとしても、我々には関係のないことだ。サクラは十五年生きている」

「でも例外というわけではないでしょう？ ユリは？ あの子は消

えてしまうの？」

蘭は瞳に涙を溜めた。

「そんなことはない。必ずユリが消えなくて済む方法を……」

「きれいな事はたくさん。まだ何もわかっていないじゃない」

蘭の言葉を聞くと、レウシアは硬く拳を握り、悔しそうに唇をかみ締めた。

廊下で蘭の言葉を聞いたユリは天井を見上げた。

（家族がばらばらになっていく。……私のせい？）

ユリは深く息をついた。

（部屋に戻ろう）

ユリは二人に気づかれないう、静かに部屋へと戻っていった。

朝になり、蘭がフライパンを叩く音を聞くと、ユリは今起きたように階段を下りていった。

家族が食卓に着くと、レウシアはシェリーが倒れたことを子供たちに伝えた。

「少し持病が悪化しただけで、すぐ良くなるさ」

レウシアは優しく微笑んだ。

「う、うん。……早く良くなるといいね」

ユリは明るく振舞おうと心掛けた。その思いがいつそう家族皆に切なさを募らせた。

その日は久しぶりに四人で公園へ出掛けたり、買い物に出掛けたりと、普段どおりの一日を過ごした。

三日が過ぎ、ユリたちが夕食を食べていると、電話が鳴り出した。

「私出るね」

「待ちなさい」

ユリが立ち上がると、レウシアは慌てて制止した。

「私が出る」

レウシアは険しい面持ちで電話に歩み寄ると、受話器を上げた。

「はい。メルですが」

レウシアは受話器を上げると、さらに険しい表情を浮かべた。

「……そうか、わかった。連絡ありがとう」

レウシアは静かに受話器を置いた。レウシアの表情から、他の三人は電話の内容を察した。

「何？」

一応蘭が尋ねると、レウシアは浮かない顔をして食卓に戻った。

「シエリー博士が亡くなった」

思ったとおりの内容であった。

「……そんな」

蘭は愕然とした。

「博士の希望で我々は葬儀には参列しない」

「……やっぱり、ドツペルゲンガーのせい？」

レウシアは尋ねるユリの頭を軽く叩いた。

「確かにドツペルゲンガーの存在が博士の心を弱くしたかもしれない。しかし、博士が死んだのは病気だよ」

レウシアは悲しみで目を細めながら、何度も首を横に振った。

「大丈夫だよ。私はユリのおかげで強くなれたんだから」

サクラは笑顔でユリに声を掛けた。

「う、うん。」

ユリは顔を引きつらせながらも目一杯の笑顔で答えた。

（サクラは消えない。でも、それは例外の出来事ではない。……）

逆らえないんだ。私はたぶん消える）

ユリはうつむいたまま部屋に戻っていった。

ユリが部屋のドアを開けると、窓の前に何かがいることに気づいた。

「誰？」

ユリは冷静に尋ねた。

「わかったか？これがドツペルゲンガーの成すべきことだ」

月明かりに照らされて、それは姿を現せた。

「……博士」

「私たちの存在は一つとなった。私は本物になった」

その存在は得意気に語って見せたが、その表情は哀しみを帯びていた。

「どうしてそんなに哀しそうなの？」

ユリが静かに尋ねるとその存在はうつむいた。

「これから私はどうすればいい？ 私は生き甲斐を失った。……

私は生き方を知らない」

「本物に、なった？ 自分が偽者だと気づいていたんじゃない」

ユリの言葉を聞くと、その存在は大きく首を横に振った。

「そんなことはない。私が本物だ」

「本物ならばそれほど自分の存在に執着しないわ。私、今ならわかる。だって、どちらも経験しているもの」

「ならば、本物を消そうと思わないのか？ お前の立場なら本物を消し、自分が消えたと思いつまらせることができるはずだ」

ユリはその言葉を聞いて鼻で笑った。

「サクラがいないのに生きていても仕方ない」

「……きれいな事だな。確かにお前にとってサクラは大切な存在かもしれないが、お前には他にも大切な存在がいる。一人のためにすべてを犠牲にするのか？」

「……」

ユリは言葉が出てこなかった。

「自分にどこまで嘘をつけるかな？」

その存在は静かに言い放つと、窓から空を見上げた。そして、足元から消え始めた。

「どこに行く気？」

「わからない。このまま彷徨うのか、消えるのか。私は何のために存在したのだろう？ 私の存在は罪か？ ……何もわからない」

その存在は空気に溶け込むように姿を消した。ユリは窓辺に駆け寄ったが、そこには影一つなかった。

（それでも私は生きていたかった）

ユリの頭に声が響いた。

ユリは窓から月を見上げた。すると、自分の体が透き通っていることに気づいた。

（私はサクラのために消える。そう決めたんだ。サクラの、ため？ 私が存在する意味は……）

悲しみがあふれ出して思考がうまく働かなくなった。何も考えられなくなったユリは糸が切れたようにその場でひざをついた。

月が太陽と入れ替わるまでユリはその場で座っていた。そして、例のごとく蘭のフライパンの音を聞くと、パブロフの犬のように条件反射で階段を下りていった。

数日が経ち、シエリーの葬儀が無事終わったという知らせが届いた。ユリは自分の存在意義がわからなくなり、覇気を失くしていた。

（……ユリ）

他の三人はユリの様子がおかしなことに気づいていたが、あえて触れずにいた。ただ単に掛ける言葉が見つからなかったのかもしれない。

四人で朝食を食べていると、インターホンがなった。

「はい」

サクラは箸を置くと、玄関へと向かった。

しばらくしてもサクラは戻ってこなかった。

「遅いな」

心配になったレウシアは様子を見に行こうと立ち上がった。すると、浮かない顔をしたサクラが戻ってきた。

「どうした？」

レウシアが尋ねると、サクラは家族の顔を見回した。

「オリールが話をしたいって」

サクラが言つと、横からオリールが顔を覗かせた。

「お邪魔します。生前祖父から言付けを頼まりましたので、伝えにきました」

オリールの言葉を聞くと、レウシアと蘭は怪訝な顔つきで目を合わせた。

「どうぞ」

レウシアはリビングの中へとオリールを招いた。

オリールはリビングに入ると、ユリの後姿を見つめた。その背中
は前よりも小さくなっていてるように感じた。

「博士の言付けとは？」

レウシアが促すとオリールは視線をレウシアへ移した。

「まず、家族の皆さんへ『辛い思いをさせてすまなかった』と。そして、ユリへ『本当に己が消える覚悟を持っているならばカナダに
来い。昔住んでいた家に唯一の救いがある』と」

「どういう意味だ？」

レウシアが尋ねると、オリールは首を横に振った。

「わかりません。ただ、祖父は倒れる直前までドツペルゲンガーについて研究していました。始めはドツペルゲンガーを消す方法、しかし、ある日を境にドツペルゲンガーが消えなくて済む方法を探しているようでした」

オリールの言葉を聞くと、ユリを除く三人が望みに胸を膨らさせた。
「消えなくて済む方法は見つかったのか？」

「おそらく見つからなかった。祖父が見つけたのはユリにとって最良の消え方でしょう」

オリールは冷静に答えた。しかし、その表情はどこか物憂げな雰囲気であった。

オリールは終始動かないユリへ目を配った。

「何を期待しているの？」

ユリはうつろな目をしながら立ち上がった。

「私、カナダへ行く」

「しかし、ユリ。カナダへ行けば消えてしまいかもしれないのよ」
蘭はつつむきながら話しかけた。

「ここに居ても同じだよ。時折透ける私の体を見て、何を期待して

いるのかな？」

ユリは哀しい顔をしながらも精一杯微笑んだ。すると、オリールはユリの体が透き通るのを目の当たりにした。

「ユリ、君は本当に……」

オリールは手を震わせた。

「ごめんね」

「……何を謝るの？ ユリは何も悪くない」

オリールは今にも泣き出しそうな顔であった。その顔を見て、ユリも同様の表情を浮かべた。

（ごめんね、オリール。好きになって、ごめんなさい）

ユリは言葉にできない想いを頭の中で唱えた。

ユリの瞳から涙が零れることはなかったが、ユリの心は間違いなく泣いていた。

「……やっぱり、カナダに行くね」

ユリは家族の顔を窺った。しかし、三人はうつむくだけで誰一人返事をしなかった。

風が庭の木々を揺らす音だけが寂しく響き渡った。

「俺が案内するよ」

重い空気が張り詰めようとする中、オリールが口を開いた。ユリは目の前に光が差ししたような暖かさを感じた。

「ありがとう」

「うん。じゃあ、いつ行く？」

二人はうつむく三人を尻目に早速話を進め始めた。

「待ちなさい。私たちも行くから」

レウシアは覚悟を決めた。蘭とサクラもまた促されるようにうなずいた。

オリールを含む五人は急遽カナダ行きのスケジュールを組み始めた。

「……では、その際に祖父の墓参りもしてあげてくれませんか？」

一通り話が終わるとオリールはお願いする形で頭を下げた。

「いいのか？」

「ええ。祖父はあなたがたのことを自分の子供のように思っているところがありました。葬儀に来て欲しくないと言ったのも自分の子供に死に顔を見せたくなかったからです。孫の私は複雑な心境でしたけれどね。倒れてからは、メル家の者に悪いことをしたと……」

オリールの言葉を聞き、レウシアはうつむき、蘭は涙を流した。

「わかった。花を捧げさせてください」

レウシアはオリールに頭を下げた。

木々の葉音が止むと、せみの声がリビングに響き渡った。

「はい、しみりしない」

ユリは昔のように元氣一杯振舞った。

「そうだよ。夏休みの旅行はカナダに決定」

サクラもユリに合わせ、元氣に振舞った。

「あ、ああ。そうだな」

「そうだよ」

ユリは一人一人の口元を指で上げ、笑顔を作らせた。

皆は表情に釣られて笑った。久しぶりにメル家に活気が戻った。

「それじゃあ、俺はこの辺で」

「うん、ありがとうね」

ユリが明るさを取り戻して、オリールは安心した。

「そのほうがユリらしいよ」

オリールが言うと、ユリは照れくさそうに笑った。

「うちの娘とどのような関係かな？」

レウシアは冗談交じりに口を挟んだ。

「バーカ」

ユリはレウシアの肩を叩くと、若干だが頬を赤らめた。そのやり取りをサクラと蘭は笑いながら見ていた。

周りの者はユリが失いかけていた人間としての感情を取り戻しているように感じた。

四人はオリールを玄関まで見送った。

「じゃあ、一週間後に自宅のほうへ迎えに行くから」

「はい。お願いします」

オリールはレウシアに頭を下げた。

「では、失礼します」

オリールはレウシアの背中に隠れたユリの顔を覗き見ようと体を揺すりながら後ずさりしながら帰っていった。その様子を見ながら、皆はクスクス笑った。

オリールを見送ると、ユリたちは早速旅行の準備に執りかかった。皆はただの旅行だと自分に言い聞かせ、明るさを絶やさぬようにしていた。しかし、ユリだけはアルバムなどの思い出の品を一緒に旅行カバンに詰めていた。

「とりあえず、これくらいでいいかな」

ユリは思い出の品だけを入れた小さめのカバンの口を閉めた。そして、椅子に座ると、机の前で一息ついた。

ユリは誕生日にオリールから貰った写真立てに目を遣った。

(たぶん、私はカナダで消える)

ユリは写真の桜を羨ましそうに眺めた。

(どうして私なのかな?)

ユリは消える覚悟を決めてはいたが、その恐怖からしばし思っではいけないことを思わずにはいられなかった。

ユリは何度も首を横に振った。

(私、最低だ。……早く消えないと)

ユリは頭を抱え、ため息をついた。そして、珍しく眠気がすると、久しぶりにベッドで横になった。

『オリール』

ユリはオリールの手を掴んだ。そして、二人は桜とユリが出会った公園を散歩した。

終始穏やかに微笑むオリールの隣で、ユリは幸せそうに笑った。陽が傾き始めると、公園の入り口からレウシアと蘭が歩いてきた。

『帰るわよ』

『はい』

ユリは元気よく返事をする、オリエルの顔を覗いた。

『行こうか、サクラ』

『えっ？』

オリエルは手を引いて駆けていった。すると、ユリは目の前でオリエルと自分が入り口に駆けていくのを目の当たりにした。

『待って』

ユリは何度も駆け寄ろうとしたが、足がその場から離れなかった。

ユリは次第に迫り来る闇に怯えながら、その場で立ち尽くしていた。

目を覚ますと、写真立てが目に入った。

「いやー」

ユリは思わず声を上げると、写真たてを手で払った。

（わ、私はユリ？ 私がサクラ？）

ユリは辺りを見回しながら、意識を冴えさせた。

（私はユリ）

ユリは深くうなずくと、ゆっくり呼吸を整えた。そして、写真立てを元の場所に戻した。

（あれが近い将来、現実となるのかな？）

ユリは泣きたくても泣けなかった。ユリは肩を震わせ、気が狂ったように大いに笑った。

朝食を終えると、ユリたちは服を買ったり、空港でチケットを買い、カナダに着いてからのスケジュールを決めたりした。

一週間が過ぎ去った。

ユリたちは朝早くに朝食を済ました。そして、ユリは部屋の一つ一つを覗き込み、そこで過ごした確かな思い出を思い返した。

（お別れだね）

ユリは哀しい顔をして部屋を隅々まで見回した。

「大丈夫だよ。また、帰ってこられる」

「うん」

レウシアに頭を撫でられると、ユリは小さくうなずいた。

「さあ、荷物を持っておいで」

「うん」

ユリは単調に繰り返すと、重い足取りで階段を上っていった。

部屋に入るとユリは窓を開け、街の香りを忘れないように大きく息を吸った。

一台のタクシーが家の前に止まった。

「ユリ、タクシーが来たよ」

「はい」

ユリは荷物を手に取ると、階段を下りていった。

ユリはタクシーに荷物を載せると、名残惜しそうに家を見上げた。

「バイバイ」

ユリは小声でつぶやいた。今にも泣き出しそうなその横顔をサクラは横で見守った。

「いつてきます、だよ」

サクラはユリの肩を抱くと、笑顔を見せた。

「ねっ」

「そうだね。……いつてきます」

ユリとサクラは寄り添うようにタクシーの後部座席に乗った。

四人はオリールを乗せると、空港へと向かった。

墓参り

八時間かけて、五人はカナダのバンクーバーに到着した。ユリとサクラは慣れない長旅で少し疲れた顔をしていた。

「これからどうします?」

オリールは空港で荷物を受け取ると、レウシアに尋ねた。

「……そうだな」

レウシアはユリとサクラに目を遣った。

「とりあえず休ませてもらえないか? 娘たちが疲れているようだから」

「わかりました。祖父の自宅へ向かいましょう」

オリールは慣れた感じで空港内を歩いた。レウシアと蘭はユリとサクラの荷物を持つと、あと少し、と二人を励ました。

五人はタクシーに乗り込んだ。

レウシアはユリの、蘭はサクラの肩を抱きながら四人は窮屈ながら続けてタクシーに乗った。

車を北へ走らせ、一同は西バンクーバーへと向かった。

「懐かしい」

緑豊かな街並み、お洒落な街灯、長い並木道、シエリーの家へ向かう途中、ユリは昔見た街並みを見ながら物思いにふけた。

住宅街から少し離れたところに一軒の家が建っていた。

「あれがおじいちゃんの家だよ」

オリールは付近の家に比べて少し立派な木造建築の家を指差し、バツクミラー越しにユリを見た。

「うん」

ユリは真っ直ぐ家を見つめた。その瞳は穏やかさが漂っていたが、その奥にはこの先何が起こっても動じないような力強さがあった。

玄関の前にタクシーが停まると、一同は荷物を下ろした。

「さあ、どつぞ」

オリールは玄関を開くと、皆を招き入れた。

家の中に入ると、木の香りが溢れていた。

オリールは四人を二階にある二つの客室へと案内した。

「狭いかもしれないけれど、こちらの部屋を使ってください」

「十分だよ。ありがとう」

レウシアは笑顔で答えると、中に入った。部屋には二つのベッドが置かれており、大きな窓からは淡い光が差し込んでいた。

レウシアと蘭は荷物を置いた。

「俺は博士の働いていた研究室へ行ってくる」

「……そう。私は博士の部屋で資料を探してみるわ」

レウシアは今朝から元気のない蘭を抱きしめた。

「いつてくる」

レウシアは耳元でつぶやいた。そして、一秒さえ惜しむように、颯爽と家を出て行った。

ユリとサクラも部屋に案内された。物置も兼ねているため部屋の間取りはレウシアたちと同じであったが、周りの荷物で一回り狭く感じた。

二人は自分たちの荷物をベッドの上に置いた。

「ごめんね、狭くて」

「ううん、いきなりお邪魔したのに部屋まで用意してくれてありがとう」

ユリはニコツと笑った。

「さて、どうしようか?」

サクラが尋ねると、ユリは腕を組み考えた。

「とりあえずパパとママのところに行こう」

「そうだね」

三人は一緒に両親の部屋へ向かった。

三人が部屋に行く途中、蘭が顔を覗かせた。

「ちょうどよかった。オリール君、博士の部屋を見せてくれないかしら?」

「え、ええ。祖父の部屋は階段を下りて左手に真っ直ぐ行ったところ
です。中にあるものは自由に使ってください」

「ありがとう」

オリールはユリの顔を窺いながら答えた。蘭は二人の様子を気にか
けたが、黙ったまま逃げるように階段へと向かった。

「パパは？」

ユリが尋ねると、蘭は立ち止まった。

「パパは博士が働いていた研究室へ向かったわ。私も調べたいこと
があるからオリール君にこの辺りを案内してもらってね」

蘭の言葉を聞くと、ユリは不満気な顔をした。

「え、でも……」

「帰ってくるまでに夕食を用意しておくから」

蘭は階段を下りると、足早にシェリーの部屋へと向かった。

(少しでも一緒に居たいのに)

ユリは寂しそうにうつむいた。

ユリたちは話し合い、蘭に言われたとおり辺りを散歩することに
した。

「どこか行きたいところはある？」

オリールが尋ねると、ユリは大きくうなずいた。

「私、学校に行きたい。私が学んだ小学校に行きたい」

ユリの言葉を聞くと、オリールとサクラは目を見合わせた。ユリの
過去に接触することがユリにとって良いことなのか悪いことなのか
判断しかねた。

「うん、いいよ。行こう」

サクラはユリの想いを優先することにした。

三人は穏やかな陽射しの中、歩いて三十分ほど掛かる小学校へ向
かった。

小学校に着くと、ユリは運動場から校舎裏まで、思い返せる思い
出を頼りに見て回った。

オリールとサクラはユリの邪魔をしないように三歩後ろからつい

ていった。

ユリはここで何をした、誰々と遊んだなど、自分の存在を確認するように説明した。

夕陽が傾き始めた。

ユリは赤く染まった校舎を見上げた。

「付き合ってくれてありがとう」

ユリは二人に笑顔を向けた。夕陽に照らされたその横顔があまりに美しかったのでオパールとサクラは思わず見とれた。

夏にもかかわらず、冷たい風が頬を撫でた。

「帰ろう。ママが夕食を作って待っている」

ユリは二人に微笑みかけた。

(さようなら)

ユリは心の中でつぶやいた。

夕暮れの中を三人は会話を交わすことなく家への帰路を歩んでいた。

三人が家に戻ると、広い食卓一面に料理が並べられていた。

「さあ、席について」

蘭は微笑みながら椅子をずらした。

「パパは？」

「今日は遅くなるって電話があったわ。さあ、夕食を食べて」

ユリはため息をつきながら席に着いた。

蘭は三人に紅茶を差し出した。

「明日は昼に博士の墓参りに行くから朝はゆっくり寝ていいわよ」

蘭は一言告げると、シェリーの部屋へと向かった。

「ママは食べないの？」

「ええ。パパが帰ってきたら一緒に食べる」

ユリは蘭の言葉を聞くと、あからさまに不満な顔をした。しかし、蘭はその顔を見ることなく部屋へと入っていった。

(もつ何回も一緒にご飯を食べられないかもしれないのに)

ユリは静かにうつむいた。心は確かに泣いていたが、その瞳から涙が零れなかった。ユリはその悔しさをかみ締めた。

「ユ、ユリ。これ、おいしいよ。ね、オリール」

「あ、ああ。よかつたら食べさせようか？」

サクラとオリールは食卓の雰囲気と和ませようと必死に話をした。

「ありがとう」

ユリは笑顔を作り、相槌を打って答えたが、目は虚ろで笑っていないかった。

夕食を終えると、三人は後片付けをし、それぞれ風呂に入った。

そして、夜が更けるまでリビングで話をした。

「パパ、遅いね」

ユリが時計を見ると、すでに日付が変わっていた。

「もう寝ようか？」

サクラは二人の顔を窺った。

「……そうだね」

オリールはユリを気にしながら答えた。

「じゃあ、サクラ一緒に寝よ」

ユリは目一杯明るく振舞うと、サクラと腕を掴んだ。

ユリはサクラを引っ張りながら階段を上った。

「オリール、おやすみ」

ユリとサクラは階段下のオリールに手を振った。

「おやすみ」

オリールは少し寂しそうに手を振った。そして、一階にある自分の部屋へと向かった。

部屋に戻ると、二人は一つのベッドに潜り込んだ。

「今日は疲れたね」

サクラはユリの肩まで布団をかぶせた。

「……うん」

ユリは気のない返事をした。

「どうかしたの？」

サクラはユリの顔を窺った。

「サクラって世話好きだよね。大人びているというのかな？」

「そう？」

サクラは照れくさそう笑った。

「うん。……そんなサクラに近づきたくて、何かにつけてサクラと競っていたように思う。それはサクラが自分より上であることを認めたくなかったからだっただけなのかな？ 私はただ、自分にサクラ以上の存在価値を見つけたかっただけなのかもしれない」

ユリの視線は自然と下に向いた。

「私が存在しているという証が欲しかっただけなのかもしれない」

ユリは平静を装って話したが、声が震えていた。

「何言っているの？ ユリは確かに存在しているじゃない」

サクラはユリを強く抱きしめた。そして、ねっ、と微笑んだ。

ユリは感じなくなつた温もりを思い返しながら、瞳を閉じた。

「明日は皆と一緒にいたいな」

ユリはつぶやいた。

「……おやすみなさい」

「おやすみ」

静寂に溶け込むように二人は眠りに就いた。

フライパンを叩く音が家中に響いた。

「ユリ、サクラ、いつまで寝ているの？ もうお昼よ」

聞きなれた音に目を覚ますと、ユリとサクラはクスクス笑った。

「起きようか？」

「うん」

二人はゆっくりと体を起こすと、大きく伸びをした。一連の動作がまったく同じだったのが滑稽で二人は互いに笑った。

ユリたちを除く三人はすでに食卓に着いていた。

「早く食べなさい。食事を終えたら博士の墓参りに行くよ」

レウシアは疲れているのか、不機嫌そうな面持ちで言った。

「う、うん」

二人は恐縮しながら席に着くと、黙々と昼食に手をつけた。

食事を終えると、一同は休む暇なくシェリーの墓へと向かった。そして、墓の前に立つと、蘭は花を取替え、レウシアは墓の埃を払った。あらかじめ決まっていたかのように動く二人の背中からは機械じみた冷たさが感じられた。その光景をユリは黙って見つめていた。

「さあ、博士に祈りを」

レウシアの指示で皆は一斉に祈りを捧げた。

（博士、あなたは私に何を見せようとしているのですか？）

ユリは一番の疑問を問いかけ、耳を傾けた。しかし、当然何の返答もなかった。

ユリは祈りを長く続けていた。

一通り祈りを終えると、レウシアと蘭は片付けをした。

「私はまた博士の研究室へ行く」

レウシアの言葉を聞くと、ユリは呆れた顔をした。

「何でそばに居てくれないの？」

ユリは小声でつぶやいた。

「これからずっとそばにいるよ。そのために調べなければならぬことがあるんだ」

レウシアはため息をつきながら、視線をユリに合わせた。しかし、ユリはレウシアと目を合わせることなく、何度も首を横に振った。

「わかっているでしょう？ 私だってわかってるんだ。これからなんてない」

「何てことを言うんだ」

レウシアはユリの顔を両手で押さえると、無理やり目を合わせた。

「私は今一緒に居たい」

ユリはレウシアの手を力一杯振り払った。

「私が消えたとして、こんな感情のこもっていない、機械的な祈りを捧げられたくない。私が消え、皆が私のことを思い出したとき、

つらい思いをされるのではないかと不安なの。思い出さないようにされるのではないかと考えると怖くて仕方ない」

ユリは震える手を胸の前に組んだ。

「みんなの中で私は笑っていたい」

ユリは胸に支えていた思いを打ち明けた。すると、瞳からは零れるはずのない涙が零れ落ちた。

皆は言葉を失った。

「……すまなかった。しかし……」

レウシアの言葉を蘭は口元に手を当て、遮った。

「ごめんね」

蘭は涙を流しながらユリを強く抱きしめた。ユリはその温もりを感じ、いつそう涙を流した。

「調べることは子供たちが寝てからでもできるでしょう」

蘭はレウシアのほうを見た。

「……ああ。そうだな」

レウシアは大きく深呼吸をすると、穏やかな顔でうなずいた。

一同は墓参りをやり直すことにした。レウシアは丁寧に墓の埃を払い、蘭は花の見栄えがいいように何度もセツティングし直した。

そして、一同は再び祈りを捧げた。

「……さあ、帰ろう」

レウシアはいつまでも手を合わせるユリに声を掛けた。

「うん」

ユリは穏やかな表情で返事をした。

ユリとレウシアは手を繋ぐと、歩幅を合わせて歩いていった。

シェリーの家に帰ると、皆で夕食を食べ、トランプゲームやボードゲームなどをして盛り上がった。

夜が更け、皆は一息ついた。

「明日、私たちの家に行こう」

ユリはためらいがちに口を開いた。

他の四人はうつむいて考えた。

「……行かないで欲しい」

意外にもオリールが真つ先に答えた。

「大丈夫だよ。そこで私が消えるとは限らないじゃない」

「……」

ユリは明るく振舞った。オリールは手を震わせ、静かにうつむいた。

(オリール?)

ユリは青ざめるオリールを見て首を傾げた。

沈黙が続き、重い空気が辺りを包んだ。そんな中、サクラはユリにゆっくり歩み寄った。

「もし、私が死ぬことでユリが助かるなら……」

「サクラ、ありがとう。でも、私はいずれ消えなければならない。

それは人が死ぬのと同じこと。それに……」

ユリは言葉を詰まらせた。

「それに、人を殺す方法はいくつもあるけれど、私がサクラを殺せる方法なんて一つも思いつかないんだから」

ユリは声を震わせながら涙を流した。サクラはユリの心を揺るがせてしまったことを悔いた。

野鳥の声が闇夜に響いた。

「もう寝るね」

ユリはゆっくり立ち上がると皆に笑顔を送った。すると、皆も精一杯笑顔を返した。

「一緒に寝よう」

サクラも立ち上がると、ユリに手のひらを差し出した。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

二人は手を繋ぐと、両親とオリールと挨拶を交わし、階段を上がっていった。

レウシアは自分の非力さを悔やみ、テーブルに拳を打ちつけた。

部屋に入ると、二人は今日もまた一つのベッドで眠った。

(今日が最後…… いや、そんなことはないよね)

二人は決して言葉にできない想いを心の中で反復した。そして、静かに一日が終わりを告げた。

別れー1

翌朝、ユリは一番に目を覚ました。

ユリは薄暗い部屋の中、サクラを起こさないよう、静かにベッドを抜け出した。そして、階段を下りていった。

（ママもまだ寝ているかな？）

ユリはキッチンを覗いた。そして、誰もいないことを確認した。

「よし、今日は私が朝食を作ろう」

ユリは小声で言うと、冷蔵庫を開いた。

ユリは普段料理など全くしないため、一度くらい自分の作った料理を最愛の人たちに食べてもらおうと思った行動である。

できあがった朝食を食卓に並べると、ユリはフライパンを片手に廊下へ出た。

「朝だよ。みんな起きて」

ユリはカ一杯フライパンを叩きながら声を張り上げた。

皆は何事かと部屋を飛び出てリビングへと向かった。すると、食卓にはフレンチトーストとハムエッグ、グリーンアスパラを主体としたサラダと蘭がいつも作るものと変わらない朝食が並べられていた。

「ユリが作ったの？」

「うん。味覚はないから味の保障は致しません」

ユリは鼻を掻いた。蘭はレウシアと目を合わせると、若干瞳に涙を浮かべながら微笑んだ。

「さあ、食べよう」

ユリは手を一つ鳴らした。そして、紅茶を入れに、キッチンへと向かった。

ユリが紅茶を差し出すと、皆揃って朝食を摂った。

「どう？」

ユリは皆の顔を窺った。

「うん、おいしい」

サクラは満面に笑みを浮かべて答えた。すると、他の三人も大きくうなずいた。

「やったあ」

ユリは小さくガッツポーズをとった。

他愛ない話をしながら、朝食は終始和やかに進んだ。

朝食を終えると、ユリは蘭と一緒に食器の後片付けをし、レウシアとサクラは出かける支度を始めた。

片づけを終えると、ユリも出かける支度をした。

(……さて、行こうかな)

ユリは支度を終わると、部屋を出た。そして、皆が待つリビングへと向かった。

ユリが玄関のほうに目を遣ると、外にはすでにタクシーが停まっていた。

「じゃあ、行こうか」

リビングに皆が集まると、レウシアは穏やかな口調で言った。

「うん。行こう」

ユリは微笑みながら答えた。サクラと蘭もニコリと笑いながらうなずいた。

「……俺は残るよ」

オリールはゆっくりとうつむいた。

オリールの言葉を聞き、ユリはオリエールのほうを見た。

「オリエール？」

「……俺は行けない」

オリエールは目を泳がせ、決してユリのほうを見なかった。

(オリエール……)

ユリはオリエールが何かを隠しているように見えた。直感的にこの先にある結末を知っているように感じた。

「うん、わかった」

ユリはいつものように明るく振舞った。

ユリは家族のほうを向いた。

「みんな、先に車に乗っていて」

「あ、ああ。わかった」

ユリが言うのを聞くと、三人は何も聞かず車に向かった。

ユリはオリールの目をまじまじと見た。

「博士は何を見せようとしているの？」

ユリは静かに尋ねた。

「おじいちゃんが亡くなったとき、ユリが本当にドッペルゲンガーなら消えるべきだと思ったんだ」

オリールは黙ってうつむいた。

「私、やっぱり消えるの？」

「でもそれは一時の感情。ユリが何の者であろうと関係ない。どんな形でも構わない。今は生きていて欲しいと思う」

「生きて欲しいか……」

オリールは言い訳するように言葉を並べた。

（私、消えるんだね）

ユリは自分が消えることを確信した。

ユリはうつむき、口をつぐんだ。

ユリの心は激しく揺れ動いていた。

『一人のためにすべてを犠牲にするのか？』

シエリーのドッペルゲンガーが放った言葉が脳裏をかすめた。

（私はサクラに生きていて欲しい）

ユリは深く息をつき、大きくうなずくとオリールにゆっくり歩み寄った。

ユリはオリールを優しく抱きしめた。

「今までありがとう。……さようなら」

ユリの言葉にオリールは思わず涙を溢した。

振り返ることなく立ち去ろうとするユリにオリールは必死に手を伸ばした。しかし、その手はユリの体をすり抜けた。

（ユリ、行かないで。俺は君が…… 好きなんだ）

オリールの口からは言葉が出てこなかった。オリールはその場で膝をついた。ユリは二度と振り返ることなく、家を出て行った。

ユリがタクシーに乗ると、皆は昔暮らしていた家へと向かった。

「大丈夫？」

サクラは走る車の中で、悲しさにうつむいているユリに声を掛けた。

「うん」

ユリは必死に涙を堪えた。

(オリールと何かあったのかな?)

サクラの疑問は言葉にされることはなかった。

車で二十分ほど走ると、ユリたちが住んでいた家が見え始めた。

「懐かしいな」

ユリは哀愁漂う表情で家を見つめた。

家に着くと、皆はタクシーから荷物を降ろし、レウシアは玄関の鍵を開けた。そして、ドアを開くと、中へと入っていった。

「……おかしいな」

レウシアは入って早々つぶやいた。

「何が？」

ユリは大きな荷物を引きずりながら尋ねた。

「五年以上放っておいたのに埃がほとんど溜まっていない」

確かに家の中は毎日掃除されているかのように綺麗であった。

「博士が入ったんじゃない？ 私たちへここに来るよう言ったのは博士なのだし」

サクラはレウシアの顔を窺った。

「博士は鍵を持っていない」

レウシアは納得のいかない顔で答えた。

(……博士は私たちに何を見せようとしているのだろうか)

レウシアは疑念を抱きながら家へと上がった。

皆がリビングに集まると、そこには誰かが住んでいるような生活感があつた。

「どづいこと？」

蘭とレウシアは目を見合わせた。

「家の中を見てくる。みんなはここにいるように」

レウシアはソファアの上に荷物を置くと、部屋の一つ一つを慎重に見て回った。しかし、人影一つ見当たらなかった。

レウシアがリビングに戻ると、テレビの前にあるテーブルに紅茶が用意されていた。

「どうだった？」

蘭は不安気な表情で尋ねた。

「誰もいなかったよ」

レウシアはソファアに座った。

「もういいじゃない。もともと不思議な家族なんだし。家だって不思議になるよ。それより、今はみんなで一杯話したい」

ユリは笑いながら言った。

「そうだね」

レウシアは深く息をつくとき、いつものように穏やかな表情を浮かべた。そして、ユリの頭を撫でた。

皆はユリが持ってきたアルバムを見ながら、思い出話に花を咲かせた。

「でね、この写真。中学のときなんだけれど、未久って子がいて……」

ユリは確かに自分が存在したことをかみ締めながら話をした。

陽が暮れ、夕食を済ませてもユリの体には特別な変化は見られなかった。

「博士はなぜ私にここへ来るよう言ったんだらう？」

ユリは誰もが思っていた疑問を口にした。

「悔いのないよう最後にみんなと同じ時間を過ごさせてことかな？」
「最後なんて言わないで」

続けて言うユリに対して、サクラは今にも泣き出しそうな声を上げた。

サクラはユリの肩を掴もうとしたが、その手はユリをすり抜けた。

体が透ける頻度が多くなっているのを感じ、ユリは間もなく自分が消えることを確信していた。

他の三人は言葉を失った。

「……ごめんね。私、疲れているみたい。先に寝るね」

ユリはアルバムなどをテーブルに残し、自分の部屋へと向かった。

サクラたちは何も言えず、今にも消えそうな愛しき者の背中を黙って見つめた。

ユリは二階にある自分の部屋に戻ると、ベッドに潜り込んだ。

(私はあと何日生きていられるのだろうか？ ……生きていられる？)

ユリは何度も首を横に振った。

(何日存在していられるのだろうか？ そもそも私は存在していると
いえるのかな？)

ユリはいくつかの問いを頭に巡らせた。そして、気づくと眠りに就いていた。

陽がまだ上がりきらない頃、ユリは体を揺すられた気がした。

(ユリ、おかえりなさい)

(ユリ、一緒に還ろう。 ……早いほうが良い。今晚にでも還ろう)
ユリの頭に聞きなれた声が響いた。

ユリが薄目を開けると、目の前にはレウシアと蘭の姿があった。

「どこへ行くの？」

ユリが尋ねると、レウシアは黙ったまま穏やかに笑いユリの頭を撫でた。

ユリはすっかりと目を開いて周りを見た。しかし、そばには誰一人いなかった。

(夢？)

ユリは一息つくくと、糸の切れた人形のようにパタンと再び眠りに就いた。

フライパンを叩く音を聞くと、ユリは眠い目を擦りながらリビングへと向かった。

「ママ、今日の朝方、私の部屋に来た？」

ユリはキッチンにいる蘭に尋ねた。

「いいえ、行つてないわよ」

蘭は首を傾げながら答えた。

（やっぱり夢か）

ユリは深く息をついた。

「さあ、ご飯を食べましょう」

「はい」

ユリは席につくと、先に起きていたレウシアと共にサクラが起きてくるのを待った。

「サクラ、いい加減起きなさい」

蘭が声を上げると、一階にある客間のドアが勢いよく開いた。

「はい、起きていますよ」

サクラは急ぎ足でリビングに向かった。いつもの光景にユリとレウシアはクスクス笑った。

（幸せてこんな身近なものなんだ）

ユリはレウシアが何故毎朝嬉しそうに笑っているのかわかった気がした。

皆が揃うと、朝食を食べ始めた。

「朝食が終わったら公園に行きたいな」

ユリは三人の顔を窺った。

「そうだね。天気もいいことだし、みんなで行こうか？」

「じゃあ、お弁当を作って行きましょう」

レウシアと蘭は笑顔で答えた。

「じゃあ、私たちもお弁当作りを手伝うね」

ユリとサクラは互いの目を見てうなずいた。

朝食を終えると、皆で朝食の片づけをしながら、同時に昼食を作った。

準備が整うと、四人は一秒をも惜しむように家を出た。

四人は鼻歌を歌ったり、時折手を繋いだりしながら、公園へと向

かった。

森林に囲まれ、中央には大きな池がある。公園は十年前と何一つ変わっていないかった。

ユリとサクラは公園に着くとブランコや滑り台など当時の遊びをしながら、二人の出会いを思い返した。

「ここでサクラと出会ったんだよね」

ユリは一本の木の下で立ち止まった。

「私の記憶、合っている？」

「うん。それで、一緒にブランコまで行ったんだよ」

サクラは小さくうなずいた。ユリはサクラが消えてブランコに移動した記憶が偽りだと知った。

「何が真実なのか、私にはわからない。でも、私がみんなと家族であったこと、みんなと暮らしたことは真実、だよな？」

ユリは確認するようにサクラの顔を覗き込んだ。

「ああ、間違えない。ユリは私の娘であり、私たちの家族だ」

後から歩いてきたレウシアは二度ユリが迷わないようにしっかりと答えた。

「よかった」

ユリは安堵の表情を浮かべるとともに涙を溢した。

風が木の枝を揺らし、擦れあう葉の音が静かな公園に響き渡った。

「ユリ、ブランコに乗ろう」

サクラは静寂を切り裂くようにユリの手を引いて駆け出した。

ブランコに滑り台と二人は再度昔を思い出しながら遊んだ。

「あの時、公園へサクラを迎えに来たのがシェリー博士だったんだね？」

「うん。……私たち、出会わないほうがよかったのかな？」

ユリは大きく首を横に振った。

「ううん。私はサクラに出会えてよかった。多くの思い出ができたし、多くのことを考えることができた。人として生きることができた」

ユリの言葉にサクラは目を潤ませた。

（ユリは人だよ）

喉まで出掛かった言葉をサクラは飲み込んだ。

「ユリ、サクラ、ご飯にしましょう」

「はい」

ユリはサクラに微笑みかけると、両親が待つ木の下へ走っていった。

（私、幸せだ）

ユリは優しく微笑む両親のもとへ一生懸命駆けていった。

昼食を終えると、四人はしばし日向ぼっこを楽しんだ。そして、

今度は四人でフリスビーなどをして遊んだ。

「……さて、そろそろ帰ろうか」

「そうね。夕食の仕度をしないといけないし」

両親は汗を拭いながら言った。

「私たちも夕食の手伝いをするね」

ユリとサクラは息を切らす両親を見て、クスクス笑った。

別れー2

四人は近くのスーパーマーケットで買い物をする、家へ帰った。そして、疲れ果ててソファで眠るレウシアを横目に三人は夕食を作り始めた。

夕食を作り終わると、ユリとサクラは食卓に料理を運び始めた。

「ユリ、パパを起こしてちょうだい」

「はい」

ユリは静かに寝息をつくレウシアのもとへ歩み寄った。

「パパ、起きて。ご飯できたよ」

ユリは何度体を揺すっても起きようとしないうレウシアを見て呆れ顔を浮かべた。

「うーん」

レウシアは面倒くさそうに返事をした。

「早く起きないと、パパの分は私が食べちゃうからね」

ユリは頬を膨らますと食卓のほうへ向かった。

(彼らとはもうすぐお別れだよ)

ユリの頭にレウシアの声が響いた。

ユリは慌てて振り返りレウシアのほうを見た。すると、レウシアは体を起こし。大きく伸びをしていた。

「どういう意味？」

ユリはレウシアに尋ねた。

「何が？」

レウシアが目丸くしながら答えると、ユリは血相を変えた。

「今言った言葉よ。もうすぐお別れってどういう……」

ユリがレウシアを問い詰めようとした瞬間、信じられないものを見た。

(……パパ?)

レウシアの後方に一瞬レウシアの姿が現れ、消えた。

レウシアはユリの視線につられて後ろを振り返った。しかし、何一つ変わった印象はなかった。

「ユリ？」

レウシアは心配そうに尋ねた。

(……博士が見せたかったものってこれか)

ユリはすべてを理解し、微笑みを浮かべた。

「ごめん、何でもない。さあ、ご飯を食べよ」

ユリはレウシアに微笑みかけた。しかし、その瞳は悲しみに満ちていた。

「ユリ？」

「ご飯、食べよう」

ユリは何も聞かないよう目でレウシアに訴えかけた。それを察したレウシアはユリに何も問うことはなく、一緒に食卓へ向かった。

「ご飯に手をつけると、ユリはたちまち涙を溢れさせた。」

「どうしたの？」

隣に座っていたサクラは心配そうにユリの顔を覗き込んだ。

「……味がする」

ユリは久しぶりにご飯の味を感じていた。

「本当？　じゃあ、一杯食べないとね」

サクラは自分の分のおかずをユリのほうへ入れた。レウシアと蘭は互いに目を見合わせて笑った。

「明日からはいつも以上においしい料理を作らなくっちゃ」

蘭は瞳に涙を浮かべた。すると、ユリは何度も首を横に振った。

「これ以上おいしい料理は作れないってことかしら？」

「違うよね。今までどおりでいいってことだよ」

蘭やサクラが言うのを聞きながら、ユリはひたすら首を横に振り続けた。

(これがきつと最後なんだ。この味も、この涙も、みんなと話をするのも、みんなの温かさを感じるのもこれで最後なんだ)　ユリの涙は止まることなく流れ出した。

「私、消えたくない」

ユリは決心が鈍らないと言わないように心がけていた言葉を口に
した。それと同時にいっそう瞳から涙が溢れ出た。

「ユリ、大丈夫だよ。感覚だって戻ってきているんだし、ユリは消
えないよ」

サクラはユリの背中を擦りながら、両親の顔を窺った。

二人は大きくうなずくと、ユリのそばに集まった。

「迎えに来たんだよね。……私は今夜消えるの？」

ユリはソファアのほうへ目を向けた。

「何？」

他の三人も同じようにソファアのほうを見た。

(……今夜、還りましょう)

蘭によく似た存在がゆっくりと姿を現した。そして、その横にはレ
ウシアによく似た存在の姿があった。

「こんなことって……」

自分とよく似た存在を目の当たりにした二人は気味の悪さに身震い
した。

(シエリー博士には話したけれど、私たちのような存在を見たもの
は、大抵その不気味さから心が不安定になる。その結果病気になり、
事故に遭い、命を落とす者も多々現れる)

男が話すと、サクラは一步前に出た。

「私は大丈夫よ」

サクラの言葉を聞くと、男は首を横に振った。

(また、私たちの存在は己の存在を求める。時には本物を疎ましく
思い、憎しみの念を抱きながら眼を向ける。その念が知らず知らず
に相手へ悪影響を及ぼす)

「それなら大丈夫よ。今までそんな風に見られた覚えのないもの。ね、
ユリ」

サクラはユリに微笑みかけた。しかし、ユリは悲しそうにうつむい
た。

(それは最近まで自分の存在を疑っていなかったからだろう。自分が何者かを知ってしまったてからは幾度か考えてしまったはずだ)
男は哀れむような目でユリを見た。ユリは悔しそうに下唇を強くかみ締めた。

(その念は本来私たちがこの世に留まる鎖のようなもの。自分の存在を知りながら、相手への憎しみが消えるとき、その存在は姿を消す。その子が自分の存在を知り、すぐに消えかかっているのは本当にあなたを愛しているからだろう)

男は穏やかな表情でサクラを見た。それはレウシアと同じ温かさを持つていた。

(今夜、私たちとともに在るべき場所へ還りましょう)
女の声を聞くと、サクラは納得いかない表情を浮かべた。

「憎しみ以外に留まる方法はないの？」

(……少なくとも、愛情では留まらない)

その言葉を聞き、ユリは下唇をかみ締めた。

「たとえば、離れ離れに暮らして、憎しみを抱き続けたら？」

サクラはユリが消えなくて済むよう必死に打開策を探した。

(病気や事故、どのような形になるかは分からないが、その想いは伝わるだろう。それに、離れ離れになるなら、その子は存在する意味をなくす)

ユリはその言葉に深くうなずいた。

「……わかった。今夜還ろう」

ユリはその存在たちに微笑みかけた。

「ユリ」

「そうしたいの。一人で消えるのは不安だけれど、パパとママが一緒なら怖くないもの」

ユリが言うのを聞くと、女と蘭は瞳に涙を浮かべた。

「ユリ」

蘭はユリを強く抱きしめた。すると、その体からは確かな温もりが感じられた。

(一緒に還ろう、ユリ)

女は穏やかに微笑んだ。

「うん。でも、このご飯だけは食べたいな」

ユリは明るく振舞った。そのあとけなさが、いつそう皆の心を打ちつけた。

(部屋で待っているよ)

男はユリに穏やかな顔を向けると、二人で他の家族に頭を下げた。そして、涙を流す女の肩を抱きながら静かに消えていった。

皆は夕食を再開したが、誰一人口を開くことはなかった。

「私、幸せだったよ。みんなのことが大好きだから消えたいと思え
たし、消えられると思った」

ユリは重い空気の中、やっとの思いで口を開いた。

「私も、私たちもユリのこと大好きなんだよ。だから、消えて欲しくないの」

サクラは必死に訴えかけたが、ユリは困った顔をしてただ首を横に振るだけであった。

「ごちそうさま。……部屋に戻るね」

ユリはあごを震わせながら席を立った。

「ユリ」

「来ないで欲しい。みんながいると決心が鈍りそうだから……」

ユリは服の裾で涙を拭った。

「でも……」

「どうしようもないんだ」

ユリはリビングのドアをゆっくりと開けた。

「みんな大好きです。だから、さようなら。……今までありがとう」

う。幸せでした」

ユリは胸にある言葉を連ねた。

廊下に出ると、ユリは鳴き声を殺しながら階段を一步一步上っていった。

三人は何度も立とうとしたが、足に力が入らず立てずにいた。

ユリが部屋に戻ると、窓辺でユリの両親が待っていた。

（もう、いいの？）

母親が尋ねると、ユリは大きくうなずいた。

「うん」

ユリはゆっくと二人に歩み寄った。

「パパとママって呼んでいい？」

（もちろんだよ）

父親は優しく微笑むと、ユリの頭を撫でた。

「パパ、ママ」

両親はユリを優しく抱きしめた。

月明かりが三人を照らすと、三人の体は光を帯び始めた。

（いい人たちだったわね。昨日一日見ていたけれど、彼らがどれ程あなたを愛しているのか伝わってきたわ）

「うん。幸せだった」

ユリは大きくうなずいた。

（みんな、ありがとう。忘れないよ。だから……）

「うん。私たちも絶対に忘れないよ」

サクラは開いた部屋の入り口から顔を覗かせた。

「何で？」

「あなたは私。想いは伝わる、でしょ？ 遠くにいても同じだよ」

サクラが部屋に入ると、続けてレウシアと蘭も入ってきた。

「何で来たの？」

ユリは目を潤ませた。

「娘を見送りに来ただけだよ。何もおかしなことはないだろう」

レウシアはいつもどおり穏やかな表情を浮かべた。

「娘をよろしくお願いします」

蘭は深々と頭を下げた。

（ええ。私たちにとっても大事な娘ですから）

母親はユリの肩を抱き寄せると、優しく微笑んだ。

三人の体が徐々に透け始めた。

「今までありがとう。……さようなら」

ユリは笑顔を作った。すると、サクラは何度も首を横に振った。
「いつてきます、でしょう?」

サクラが言うのを聞くと、ユリはクスツと笑った。

「いつてきます」

ユリは満面の笑みで言い直した。その頬を一筋の涙がこぼれ落ちた。
「いつてらっしゃい」

答えたサクラもまた真っ直ぐ涙を流した。レウシアと蘭はその様子を優しい瞳で見守った。

ユリは月の光に溶け込むように姿を消していった。

「ユリ、ユリ」

サクラは窓辺に駆け寄った。しかし、そこにユリの姿はなかった。

「ユリ」

サクラは先ほどまでユリがいた場所で膝をつき、涙を流した。

(あなたは私。いつもそばにいるよ)

「うん」

心に響いた声に返事をする、サクラは窓に映った自分の姿を見つめた。

蘭はその場で崩れ落ちるように膝をついた。

「……ユリ」

レウシアは大粒の涙を溢した。しかし、自分が涙を溢していることに気づいていなかった。

サクラは気持ちを落ち着かせると、両親のほうを見た。すると、二人とも大粒の涙を零していた。

「何よ、二人とも。そんな顔をしていたらユリに笑われるわよ」

サクラは目一杯笑顔を作った。その顔を見た二人は本当にユリに笑われている気がした。

「ああ、そうだな」

レウシアは小さくうなずくと、蘭の肩に手を置いた。

「そうね」

「そつだよ」

サクラは終始明るく振舞った。レウシアと蘭は辛いはずのサクラの姿に励まされ、強くなるうと心に決めた。

「さあ、今日はもう寝よう」

サクラは落ち着いた口調で言うと、二人に抱きついた。

家族三人はユリのベッドで共に眠った。サクラが蘭の胸の中で留まることのない涙を流した。

ユリがいなくなって一年が過ぎた。

家族三人はカナダの家に戻り、サクラは地元の高校へと通うこととなった。

「サクラ、早く起きなさい」

相変わらずフライパンを叩く音で目を覚ましたサクラは階段を駆け下りた。

「ご飯は？」

「遅刻するからいらない」

サクラは牛乳を一気に飲み干すと家を飛び出た。

「サクラってあんなに騒がしかったか？」

レウシアはため息をついた。

「たまにユリと区別がつかなくなるわね」

蘭は去年サクラの誕生日に撮ったユリとサクラの写真を見つめた。

「さあ、あなたも早くしないと遅刻するわよ」

「おつと、いかん」

レウシアは腕時計を見ると慌てて立ち上がった。

サクラは学校への近道としてユリと出会った公園へ入っていった。

（ユリ、元気にしている？ 私もパパとママも元気にしているよ。

私ね、運動部に入ったの。しかも、なんと陸上部。それでね……）

サクラは思い出の木の木の下で立ち止まると、空を見上げた。

「いけない、遅刻する。じゃあ、またね」

サクラは全力で走り始めた。

(いつてらっしやい)

聞きなれた声が頭に響くと、サクラは慌てて振り返った。

公園には誰一人見当たらなかったが、ブランコがゆっくりと揺れていた。

「いつてきます」

サクラはニコリと笑うと、雲ひとつない青空の下再び走り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2279c/>

ドッペルゲンガー

2010年12月10日14時34分発行